

貼紙横断

From Goronjorama



# 第1章 クルミちゃんの朝

---

猫のアビルは、お気に入りのバスケットから出ると、東に向いている出窓の下へ歩いていきます。きっぱりとした目覚めは、彼女の美意識そのものです。

無駄な動きをせず、音もたてず歩いてきた出窓の下、そこには四つの点が標してあるかのように、アビルの足は毎朝同じ位置でピタリと止まります。

視線をまっすぐに定め、後ろ足はピクリとも動かさぬまま、前足だけをツーツと直線を描くように、前へ前へと伸ばしていきます。

自分の前足の長さに十分に満足する所まで伸ばしきると、お尻をツンと突き上げ、今度は後ろ足の長さを確認します。

伸びるだけ伸びた体を、両足の爪でがしりと床に固定し、目を細め、プルプルプル...

心地よい振動を、全身に隈無く与えます。

そして仕上げに、三本の足でバランスを取りながら、左の後ろ足を床と水平になるように

ピン！と伸ばし、||猫の伸びとはこうするものよ、アン、ドウ、トロワ||。

こうして、リズムカルに朝を迎えるアビルの動きは、これから始まる大切なお仕事の序曲にしかすぎないのです。

大切なお仕事...

アビルは、スイッと出窓に飛び乗りました。

黒とグレイの細かな縞を、長いしっぽの先まで几帳面に入れたアビルの体は、四本の足先が真っ白です。アビルはそれを淑女の証として心良く受け入れ、薄桃色の肉球のついた白いフワフワの手袋と靴下の手入れを怠りません。

実はもう一カ所、真っ白な場所があります。

鼻先に黒いポイントを残し、口のまわりがグルリと円形に白くなっているのです。常に白いドーナツをくわえているように見えてしまうのです。

||||誰にだって、一つや二つ残念な所はあるものよ。||||

強気な心を見せつける為に、白いドーナツはだいぶ役に立っているようです。

東の出窓には、青い水玉のスカーフをかぶったアヒルと、ピンクの水玉のスカーフをかぶった黄色いひよこが、賑やかにプリントされたカーテンが下がっています。

小さな女の子の部屋にはお似合いですが、それはくるみちゃんのためにというより、いくつ

になっても可愛い物が大好き！...な、かあさんの好みです。

アビルは尻尾だけをカーテンのこちら側へ残し、右に左にパターン、パターンとさせながら外を眺めています。尻尾の動きがピタリと止まりました。音をさせずに出窓から飛び下りると、くるみちゃんの眠る枕元へ来て、頭の上に帽子のように座り、おでこの上で前足を折りたたむと自分の顎をくるみちゃんの鼻先にペタッと乗せました。

やがて太陽が登り、出窓のカーテンの隙間から朝日がスーと差し込んで来たその時、

よし、今だ！

ゾーリ・ゾーリ・ゾーリ・ゾーリ

アビルは、一心に、くるみちゃんの鼻の頭をなめ始めました。

「あふあひゃー」

くるみちゃんは、目をつぶったまま、急いで小さな手で鼻をかくします。

そうでもしないとザラザラとしたアビルの舌はとても痛いし、毎朝のことなので鼻の頭が赤くなっていきそうで恐ろしいのです。

「ワカッタヨ モウ オキルヨ」

くるみちゃんは、鼻をギュッと押さえたままアビルに言いました。

アビルとくるみちゃんにはもう一つ、毎朝していることがあります。

「いい？ いくよ！ 一、二のお、三！！」

くるみちゃんは背中を真っ直ぐにして起き上がりました。

「やったあー、今朝も大成功！」

アビルはみごとに、くるみちゃんの頭の上に乗っています。

「はい、降りて。今日の空は、どんなかな？ 行くよ！ よーい、どーん」

くるみちゃんとアビルは、寝室を飛び出し、屋根裏部屋へと続く木の階段を、トントントンと駆け上がっていきます。くるみちゃんが三段目あたりに来たとき、すでにアビルは階段の一番上において、くるみちゃんを見下ろしているのです。

くるみちゃんは、屋根裏部屋のてっぺん窓に走り寄りました。

緑色に塗られた木の鎧戸の前で、クイツと爪先立ちをすると、両手を大きく広げながら鎧戸を外へと押しあげました。

「うわあ〜、きれいな空。気持ちの良い日ね、アビル」

開かれた窓から、新しい光にあふれた青空と朝露の匂いをたっぷりと含んだ新鮮な風が次から次へと屋根裏部屋の中に飛び込んで来ました。

「あ～いい匂い！ わくわくする日だね、アビル」

アビルは「とっくに知っているわよ」と言わんばかりに、鼻の頭をちょっとばかり上向きににして、開け放した窓枠の上にチョッコリと座っています。

くるみちゃんは窓枠に頬杖をつき、ニコニコしながらいつまでも空を眺めています。

くるみちゃんは、赤ちゃんの頃から、空を眺めるのが大好きでした。

一人で屋根裏部屋に上がって来られるようになってからは、毎朝この大好きなてっぺん窓に来て、アビルと一緒に外を眺めます。

曇りでも雨でも空を見るのは大好きです。なんてたって、くるみちゃんが一番最初に言葉をつなげておしゃべりしたのは「アメ、フツテッタ」（雨降って来た）だったのですもの。

てっぺん窓からは、ラクダ山や草原、オリーブ畑やコッパーさんのぶどう畑が見えます。

くるみちゃんの家の庭には、いつものように犬のデイジーが、くるみちゃん達を見上げてピョンピョン跳ねています。

「おはよう！ デイジー！」

くるみちゃんは大きな声で言いました。

その声に答えるように、デイジーは早く回ったり、飛び跳ねたり、急に止まって座ったり、三階のてっぺん窓を見上げては、ハアハアと笑ったりしています。

「あっはっはっ おかしなデイジー」

「あっ、そうだ！ そうすけくん起きたかなあ」

くるみちゃんは、グーンと窓から体を伸ばしてみました。

すぐ隣はおじいちゃんの家です。

おじいちゃんの畑の向こうには、少し林があって、その先に三軒の家が並んであります。

一番手前がそうすけくんの家です。

そうすけくんの部屋の窓は、くるみちゃんのとっぺん窓の方に向いています。

窓はまだ、閉まっていた。

「おねぼうなそうすけくん」

くるみちゃんは独り言を言いました。

アビルは、てっぺん窓からヒョイツと二階の屋根に飛び降り、何か面白いことがないか探しに行っていました。

アビルが外でコソコソ楽しんでいること。それは...小鳥に出会ったり、風で吹き寄せられた葉っぱの中から虫を見つけたり、裏庭の木の周りにいたリスが、アビルを見つけて大急ぎで逃げ回るのを見たりすること。

ついでに、キッチンの窓から上がってくる朝ご飯の匂いも、たっぷり吸い込めます。

屋根裏部屋の真ん中、いちばん天井の高いところから、三本の紐が長く下がり、その下には木でできた、がっしりとした椅子が置いてあります。

三本の紐のしかけも、木の椅子も、くるみちゃんの五才の誕生日にとうさんが作ってくれたものです。

くるみちゃんにとっては、とても大切な仕掛けの紐で、毎日使っています。

今朝は、三本の紐のうちの黄色い紐を、ヨイショと引っ張りました。

屋根の上でカタンと音がすると、思わずニッコリしてしまいます。

五才の誕生日から八ヶ月、毎日のように引っ張って来たのは、緑の紐か、赤の紐です。

緑の紐を引くと、屋根の上に緑色に塗られた木の旗が立ちます。

そうすけくんと〈草原で遊ぼう〉の合図の旗です。

赤い紐を引くと赤い旗が立ちます。

〈くるみちゃんの家に来てね〉の合図です。

そして黄色の旗は、〈貼紙横町へ行こう〉の合図なのです。

くるみちゃんとそうすけくんだけの、秘密の合図の旗なのですが、もちろん村の人みんなが知っています。犬のデージーにだって、ちゃーんとわかっているのです。

二階の屋根の探検から、アビルが戻ってきました。

くるみちゃんにむかって『ごあーん』と鳴いています。

アビルはくるみちゃんの耳元まで近寄り、もう一度『ごあーん』と鳴きました。

庭では、デージーが、『そうだそうだ、ごあーんだ』と言っているかのように大賛成しながら、クルクルと走り回っています。

「そうだった、ごはんね」

アビルとデージーに朝ごはんと夕ごはんを忘れずに用意し、お水の入れ物もきれいに洗って、新鮮なお水をいれるのは、くるみちゃんの大切な仕事です。

屋根裏部屋から降りる前に、くるみちゃんはもう一度つま先立ちをして、グンと体を伸ばし、そうすけくんの部屋を見ました。

「あっ、窓が開いている！ 合図が出たよ、さあ忙しくなるよ、ご飯にしよう」

くるみちゃんとアビルは元気よく、階段を降りていきました。

そうすけくんの部屋の窓は開かれ、窓枠の上にある引っ掛け釘に、自転車の車輪が一つ掛けてありました。

今ではもう、小さくて乗れなくなってしまった自転車の車輪を、赤く塗って合図の旗の変わりに掛けています。

そうすけくんからの合図は、いつもこの赤い車輪です。

いつだって〈オッケー〉の合図なのです。

そうすけくんは自転車が大好き。最近新しくした、お気に入りの青い自転車に乗って、どこへでも行きます。

二人の住んでいる村から、貼紙横町まで行く時にも、木馬やワゴンに乗らずに自転車を漕いでいきます。

自転車の後ろには、紐が何本か結び付けてあり、その紐の先にはこんなものがくくり付けてあります。

足がクルクル動く三輪車に乗った《猿のお人形》

硝子玉がたくさん入っている《珈琲の缶》

自分で作った《木彫りの青虫》（お腹の下にはオモチャの車が付いていて、色の違う足がなんと**26**本も付いている、なかなか素敵な青虫です）

トム爺さんから貰った《錆びたスコップ》

そうすけくんの自転車の後ろの紐は、ときに十本にもなります。

そんな時は、こんがらがってしまったたくさんの紐を解くのに、内緒ですが...実はひと苦労しているのです。

## 第2章 風車と木馬とゆりかごワゴン

---

くるみちゃんと、とうさんと、かあさん、それに犬のデイジーと猫のアビルは、木馬風車の乗り場までやってきました。

村と貼紙横町を結ぶ大草原には、10基の風車が堂々と並んでたっています。

5基は木馬のため...、あとの5基は二人乗りのゆりかごワゴンのために...

風車は草原に吹く風を受けて、大きな歯車をゆっくりとまわし、たくさんの木馬やゆりかごワゴンをぐるりぐるりと動かしているのです。

昔、村の人々には、草原に吹くラクダ山から吹き下ろされる山風と、海から上がって来る海風を色で見分ける事ができたそうです。

緑色の髪を揺らす山風の女神達と、水色の髪をたっぷりと蓄えた海風の女神達が、草原で出会い、手を繋ぎくるくると輪を広げて、唄い踊り続けます。その姿を何度も目にした村人達は、風の吹く村の入り口に、女神を讃えるための風車小屋を建てました。

それは今から約300年も前のことです。

風車の羽根はメリーゴーランドのように風車のでっぺんで横に回ります。

風を受ける大きな羽根も木で作られました。

羽根を取り付けた太い回転軸にあけられた四角い穴は、木造の歯車の歯と噛み合います。

一番の歯車の下に付けられた六つの突起は、少し大きな二番の歯車に開けられた穴と噛み合い、二番の歯車に付けられた十個の突起がもっと大きな三番の歯車の穴と噛み合い、風車の羽根の回転を調節しています。

昔の村人達は皆で風車の世話をしてきました。

風が凧いでいる日には、二番と三番の歯車を外します。

大風の日には、三番の歯車に錘りをかけ、嵐の日には風車のでっぺんから羽根を外して、でっぺんに蓋を被せて風車を守ってきました。

一番の歯車から四つの長いブランコが降りていて、木彫の山の女神と海の女神が乗せられ、美しく彫られた女神達は長い髪をなびかせて、ゆーらりと風の中を回っていたそうです。

昔の人々は、山を、海を、草原を、そしてそこに吹く風を愛し、女神達を讃えた風車小屋を守り大切にしてきました。

風の吹く村に伝わる風土記には、約300年前にその風車を造った時の村人達の思いや、克明に記された設計図、建てた大工の名前、女神の像を彫った木彫り職人の名前、風車小屋ができるまでの日誌、風車が回り始めてからの毎日の風向きや村の出来事が、細かく綴られています。

永い年月の流れの中で、いつしか木造の風車は朽ち果てました。

何代にも渡り、風の吹く村の村人達は風車を失ったままだったのです。

しかし、村人たちが草原に吹く風に熱い思いを抱く心は変わりませんでした。

風車は世代を越えた村人の力で復活したのです。

1番風車は、128年前、昔、木造の風車が建っていた場所に石とレンガで再建されました。

新しい風車の羽根は鉄棒と幌で造られ、歯車から降ろされたブランコの他に、木馬も2頭が紐で吊るされました。木馬はイサベルとフェルナンドと名付けられ、誰でも自由に乗り降りできるような工夫がされました。

「復活」(revival)と言う名前が付けられたこの風車を皆は愛称で「リブ」と呼んでいます。

「リブ」が誕生してから10年後に2基目の「オリーバ」が、「リブ」の隣に(隣と言っても500メートル先ですが)建ちました。

「リブ」と「オリーバ」は長い鉄線で結ばれ、大きな回転木馬になり、風を受けて10頭の木馬が回ります。

10年ごとに風車が1基ずつ建てられ、風車と風車を結ぶ回転木馬は貼紙横町へ伸びて行きました。

3基目は「アグア」、4基目には「ウバ」、5基目には「ロメロ」、そして6基目の「イーゴ」が貼紙横町の入り口に待合室として建てられ、風の吹く村から貼紙横町まで木馬を動かす鉄線が繋がったのです。

木馬も数が増えました。誰でも、いつでも、どの風車からでも、木馬に乗り降りできるようになりました。それぞれの風車のそばには風車小屋が建てられ、管理人が常に風車の世話をしています。

風車は、村と貼紙横町を結ぶ立派な交通機関へと成長していったのです。

「イーゴ」が誕生してから10年後。今度は、風の吹く村の隣村・ラクダの尻尾村に向かって風車を建てていきました。7基目「ポメロ」、8基目「エスパラゴ」、9基目「セレッサ」、10基目「メロコトン」...、そしてとうとう「リブ」が再建されてから100年目に11基目「ヌエス」が誕生。風の吹く村から貼紙横町、そしてラクダの尻尾村まで、風車の鉄線は繋がったのです。

「ポメロ」から「ヌエス」までの鉄線には、木馬に変わりに「二人乗りの揺りかごワゴン」が下げられました。

赤ちゃんをだっこしたり、荷物がたくさんある時にも、安心して乗り降りできるし、何より、おしゃべりしながら、ゆーらり揺れるのはとても楽しいものです。

今日も、なかなか寝つかない赤ちゃんを抱いたお母さんや、お散歩ついでの人達が、草原の風を受けて揺りかごに揺られています。

村の入口の1基目風車「リブ」には、羊飼いのユーリンさんが住んでいます。

ゆりかごワゴンの11基目風車「ヌエス」には、トム爺さんが住んでいます。

二人はいつも力を合わせて、木馬やゆりかごワゴンのお世話をしてくれています。

くるみちゃん達がやって来たちょうどその時、木馬風車の乗り場ではひと仕事終えた牧羊犬のカーロンとツァルトに、ユーリンさんが水を飲ませていました。

この水は特別です。

ラクダ山の森にある「ワクワクの泉」から汲んで来た、とびきりおいしい水なのです。

ユーリンさんは、生き物に必要な水や食べ物は、どんなものが良いか、ちゃんとわかっていて、葡萄園のコッパーさんにわけてもらった大きな樽に、「ワクワクの泉」の水をいつも絶やさぬように入れておきます。樽には大きな貼紙が貼ってあります。

【美味しい水はいかがですか？ たっぷりとどうぞ！】

村の人達は、この水を楽しみにしていて、美味しい水をご馳走になった後には、貼紙をして帰ります。

【お水、ご馳走様。次に羊毛を届けてくれる日がわかったら貼紙してね。その日に合わせて、ほうれん草とたまごのパイを焼きますね。.....トモコ】

編物が得意なトモコさんの貼紙です。

【うちのそうすけが、しんべいの顔に眉毛を描いてしまったの。今度のはなかなか落ちないし、しんべいがお散歩に出たがらなくて困っています。カーロンになぐさめに来てもらえないかしら。.....ウララ】

そうすけくんはまた、真っ白な犬のしんべいに、いたずら描きをしたようです。

【例のあの白葡萄のほうのワインだけどね、あんがい良い具合になってきたよ。まだ、ちょっと早いけど、味見をしに来てくれよ。意見を聞きたいんでね。.....コッパー】

【あんたが言っていた、11番目のワゴンの扉に、油をたっぷりとくれてやった。もう、キーキーいうことはあるまいよ。うん。わしゃ、そう思う。昨夜のこった、わしゃ、どれが11番目のワゴンかずっと考えておっただよ。なんせ

、一日中グールリグールリ回っているで、どれが11番目のワゴンかさっぱりわからなかった。けど、わしゃ、えらいこと思いついただ。「そうだ、全部のワゴンの扉に油をくれてやればいいだ！」とな。うんだでもう、当分の間心配はいらねえこったよ。うん。わしゃそう思う。】

トム爺さんの楽しい貼紙です。

みんなはトム爺さんの貼紙が大好きで、貼紙を手に入れると、部屋の壁や暖炉の上、ベッドの横などに張って大切にしています。

トム爺さんはみんなの爺さんなのです。

いったい今いくつだか、トム爺さんにさえ、もうわからなくなっていました。

なんせ村で一番年上の婆ちゃんが言うには

「私が若かった頃、トム爺さんはもう、爺さんだったのよ」

と言うのですもの。

けれどトム爺さんはすこぶる元気。よく居眠りし、よく笑います。背中も真っ直ぐ、歩きも達者で、ワゴンに貼紙付きの荷物が乗ってくると、ヒョイと届けてくれます。

遠くへの配達物は、ユーリンさんの犬のカールンが大活躍です。

トム爺さんは、よく言います。

「カールンはえらーおつむがええだ。博士だ」

カールンは、人間の言葉がすべてわかりますし、村の家すべてを知っています。

配達用の革袋に荷物を入れて、カールンの背中に背負わせてやれば、間違いなく荷物を届けてくれます。

カールンが配達へ行くときに、甘えん坊の羊達がついて来てしまっても、よその畑や花壇に寄り道をしないように、ちゃんと見張りながら面倒見良く連れて帰ってきます。

くるみちゃんはカールンに会う度、いつも真剣にたくさん話し掛けてみます。

いつか、きっと、カールンは人間の言葉を話すに違いない、と信じているからです。

第3章へ

### 第3章 そうすけくんの青い自転車

---

くるみちゃんと、とうさんとかあさんは、次々と木馬にまたがり、ユーラリユーラリと出発しました。

デイジーは、ひとしきりカーンやツアルトと遊んでから、くるみちゃん達の乗る木馬の下を走って貼紙横町へ向かいます。アビルは、くるみちゃんのお腹の前に座りました。

木馬は緑色の空気の中を、ゆっくり泳ぐように進んでいきます。

木馬の下の草原には羊たち、右手のオリーブ畑のずっと向こうにはラクダ山がそびえています。

ラクダ山にはふたつのコブがあり、山裾には白い岩がゴツゴツとあります。その姿はまるでラクダが足を折り曲げ居眠りしているように見えるのです。

オリーブ畑の真ん中の黄色い細道を、砂ぼこりを巻き上げながら、ピューツと青い自転車が飛ぶように近づいて来ました。そうすけくんです。

お尻を浮かせて前屈みになり、真剣なまなざしで自転車を漕いでいます。

自転車の後ろの紐には、猿の人形が飛び上がるように付いて来ています。

青虫はとっくに気絶したようで、腹を見せて青虫あおむけです。

珈琲缶はウンポコ、ウンポコと、土ぼこりの中をひきずられていきます。

そうすけくんは草原に乗り上げ、わざわざくるみちゃんの乗っている木馬の下をくぐりながら、

「うー、きゃっほおーい」

と声を出しました。くるみちゃんはおかしくて足をブラブラさせながら

「ぐーふ、ぐーふっ」

と鼻から大きな息がでちゃいました。

アビルは木馬の頭に飛び乗り、そうすけくんに追いつかれると、小さな声で

「にやややややや」と、そのスピードに抗議...

「くるみいー、おさきにしっつれいー。うーっきゃっほっほーい」

そうすけくんの乗った青い自転車は、みるみる小さくなっていきました。  
くるみちゃんはゆっくりとした木馬にまたがりながら、今日これからの事を考えました。

今日は特別な日、かあさんの誕生日です。

かあさんに内緒でプレゼントを買うために、とうさんと二人で秘密の暗号を描いた貼紙をこっそり用意しました。いつものように遊んだりせずに、素敵なプレゼントを見つけようねと、とうさんと約束したのです。

くるみちゃんは、背中をピンと伸ばしました。  
少し大きくなって、お姉さんになったような気分です。

「きっと素敵なプレゼント、見つけられるよね、アビル…」アビルの背中を撫でながら言いました。

くるみちゃんの乗った木馬はゆっくりですが、だんだんと、海の匂いのする方へ近づいています。

朝陽がキラキラと海を照らし、光りの粒が空と海とを埋めつくしています。

《貼紙横町》は、もうすぐです。

貼紙横町の真ん中には噴水広場があり、それを囲むようにぐるりと円形にお店が並んでいます。  
噴水から光りの筋が伸びるように、八本の横町があります。

木馬横町、おしゃべり横町、職人横町、らくだのよだれ横町、昔横町、うみねこ横町、海岸横町、おかず横町の八本です。

八本の横町には、たくさんの店や家があり、大勢の人が暮らしています。

貼紙横町の人々は、代々たいへんなおしゃべり好きです。誰かと誰かが出会えば、おしゃべりが始まります。そしてだんだんと人の輪が大きくなり、椅子が運ばれ、お茶が運ばれ、食事まで始まってしまうのです。横町の人達は、些細な楽しい事も見逃しません。何もおしゃべりすることがなくなると、次々と新しく楽しいことを考えていくのです。

“木馬達に名前と誕生日を与えよう！”

“そうだ、そうだ。毎月、木馬の誕生日をしよう！”

こんなふうに昔から、木馬にもワゴンにも風車にも名前が付けられ、誕生日や記念日が与えられ、みんなで集まって歌ったり、踊ったり、おしゃべりをして楽しむのです。

お店の仕事も畑仕事もあったもんじゃないありません。

みんなは、どうしたらたくさんおしゃべりをしていただけるかを、おしゃべりしました。

おしゃべりした結果...どうしてもしなければいけないことや、やって欲しいことは、お互い貼紙に書いて張っておくことにしたのです。貼紙には大切なことを書くようにしました。楽しい貼紙には《貼紙大賞》を与えることも決めました。

どこの家でも、アルバムに家族の写真を貼るように、大切な貼紙を保存しています。赤ちゃんが初めて書いた貼紙とか、大好きな人から貰った貼紙、昔々のおじいちゃんやおばあちゃんの貼紙も大事にとってあります。

風が強い日は、みんなこぞってソワソワします。強い風に飛ばされてしまった貼紙を、ワイワイおしゃべりしながら、必要な人のもとへ再び貼りに行くのです。なかには迷子になってしまう貼紙もあります。行き先のない貼紙を拾った人は〈幸運のしるし〉として大切にします。みんなは自慢の貼紙を見せ合いながら、おしゃべりをして楽しむのです。

愉快的貼紙横町に近づいて来たくるみちゃんは、おしりがムズムズして木馬からずり落ちそうになりました。

「おーっといけない」

くるみちゃんは木馬の棒をギュッと握り直しました。さあ、いよいよ到着です。

「とうさん、かあさん、先に行ってるね」

くるみちゃんはそう言いながら、もう全速力で走っていました。噴水の周りにガヤガヤと人の輪がありました。人垣の中を、潜るように前に進んでみると、なんと、その真ん中に立っていたのは.....そうすけくんです。頭にはタオルを巻かれ、ダブダブのチェックのシャツからは、裸足の足先が少しだけ見えています。

「どうしたの？そうすけくん！」

くるみちゃんは走り寄って、タオルに包まれたそうすけくんの顔を覗き込みました。

「この子ったら、くるみちゃんが広場に来るまでに、何回噴水の周りを自転車で回れるかって全速力で走っているうちに、目がまわって噴水に飛び込んだのよ」

うちわでそうすけくんを仰ぎながら、ミカさんが答えてくれました。

「あと、もう少しで18回だったんだ」

そうすけくんは、腕をあげて指を出そうとしましたが、袖が長くて手が出ません。おどけた様子のそうすけくんを見て、まわりのみんなは大笑いです。

「あらまあ、なにかと用意の良い子だわ。自転車の後ろの紐に、靴がくくりつけてあるわ。これで、裸足でいなくてもすむわね」とヒデコさんが言いました。

時計屋のヒデコさんが一番に駆け付け、ずぶぬれのそうすけくんを助け出し、タオルで拭いたり、旦那さんのチェックのシャツを着せてくれたのです。

「僕、何かと用意がいいんだ」

そうすけくんが得意げに胸をはったので、みんなはまた大笑いしました。

「さあ、この服をサッサと洗って乾かさないとね。忙しくなるわ。そう、そう忙しくなるわ」

ヒデコさんは、「そう、そう」と言うのが口癖です。

「そう、そう、ウララさんに貼紙を送らないと。着替えが早く欲しいものね。木馬の首輪に貼紙を付けに行かないと！」

ヒデコさんは、自分で自分の言葉に「そう、そう、」と頷きながら、忙しそうに立ち去りました。

ヒデコさんが貼紙を付けた木馬は、ゆっくりと村へ向かいます。

貼紙は人から人へ、あるいは人から賢い犬のカールンへと貼られて、そうすけくんの母親のウララさんのもとへ向かいます。

ウララさんが、そうすけくんの着替えの包みを《ヒデコさんへお願いします》と貼紙をつけて木馬に乗せれば、ユーラリ、ユーラリと回って、また人から人へと渡り、ちゃんとヒデコさんのもとに届くのです。

第4章へ

## 第4章 につちゃっちゃんのお弁当屋さん

---

さて、何はさておき、くるみちゃん達は《につちゃっちゃんのお弁当屋さん》へと、向かいました。

《につちゃっちゃんのお弁当屋さん》は、とっても親切なお店です。

持参したお弁当箱に、好きな物と食べたい時間を書いた貼紙を付けて、お店の左側の棚へ置いておけば、ちゃんと希望の時間に、希望のお弁当が、右側の棚にできているのです。

とうさんとかあさんもくるみちゃんも、自分の弁当箱を、貼紙付きで左の棚へ置きました。そうすけくんも、ビッチョリ濡れた布と、【たまねぎぬいたやつ】と書いた貼紙を、左の棚へ置きました。

弁当の入れ物は、どんな大きさでも大丈夫。どんぶりでも、お皿でも、壺だって、葉っぱだって、紙だって、おかまいなし！ なんでもござれ！ おまかせあれ！ 《につちゃっちゃんのお弁当屋さん》です。

さあ、これで安心。お昼にお弁当を取りに来るまで、みんなは

「いち、に一の、さん！」

で行きたい所へ行くのです。デイジーもアビルも、もうとっくに行きたい所へ行っています。

くるみちゃんには、デイジーとアビルがどこにいるか、ちゃんとわかっています。

デイジーは親友のユズちゃんの隣に座っているはず。アビルはマダムの猫・シータちゃんに会いに行ったはずです。

シータとアビルは、いつもいつも張り合っているライバルです。

どちらの毛並みがより綺麗か...、どちらのヒゲがより強くピンと張っているか...、どちらの方が軽々と飛び上がったり、音もなく優雅に飛び降りたりできるか...、どれだけ知らん顔しながら、パシッと一発で蛾を落とせるか...。いつも競いあっているのです。

優雅さ、気品の高さが勝負なのです。

お互いに知らん顔しながら、耳の角度を調節して、テレパシーでその自慢を送り合うのです。優雅ではない猫には、見向きもしません。

お互いにライバルでありながら「彼女となら、ずっと張り合っただけでもいいわ！」と思っているのです。



## 第5章 ミカさんの蛸壺

---

とうさんとかあさんは、仲良く買い物に出掛けました。くるみちゃんとそうすけくんは、ミカさんのお店にふらりとやってきました。

ミカさんは《蛸壺》という、陶器のお店を開いていますが、今はなぜか、店の片隅に設けた特設コーナーで、毎日忙しく野菜を焼いています。

ある日、ミカさんが店番をしながら、陶器で出来たフライパンの中に、新鮮な野菜とオリーブオイル、塩、胡椒、ニンニクを少し入れ、陶器の蓋をのせ、蒸し焼きにしたものを食べていました。その美味しそうな匂いに誘われて、お客さんが集まってきました。一人、また一人と増えていき、すっかり人気商品になってしまいました。

小さな陶器のフライパンは可愛いし、野菜がほっこりして、とても美味しいので、次々とフライパンが売れていきます。ミカさんの陶器のフライパンづくりは、毎日夜遅くまでやっても間に合わないぐらいです。

粘土のかたまりから、フライパンと蓋を作り、ゆっくりと乾かします。乾いた順番に窯で焼いて、フライパンに色を付ける釉薬という液体をかけてから、また窯で焼きます。手数と日数のかかる仕事です。

ミカさんは、ハッチとチッチという二匹の蛸と暮らしています。

大きなハッチと小さなチッチ。

二匹はいつも、ミカさんの店の石壁を、上ったり下りたりして遊んでいます。暑い日にはひんやりとした大きな壺の中で眠り、寒い日には、窯の傍のほんわかしたレンガに、ダラーツとぶらさがるように張り付いています。

ハッチとチッチはミカさんが大好き。

ミカさんが、汗をかきかき陶器の窯焚きをしていると、ハッチとチッチは頭にハチマキをして、一生懸命うちわでミカさんの背中を扇いであげるので。

ミカさんのお店にも、たくさんの貼紙が貼ってあります。

【たくさん同じ物を注文なさるときは、ひと月ぐらいの時間の余裕をくださいね】

【赤ちゃん用の器には、かわいい模様と名前を入れてお作りします】

【次の月の壺の模様は、赤のパプリカと緑のパプリカが並んだ作品の予定です】

ミカさんは、毎月テーマを決めて、その月毎に違った絵を描いた壺を作っています。

杏の絵の壺なら二年前の八月とか、マスカット色の葡萄の絵なら去年の九月とか、すぐにわかるのです。

店の外の棚には、たくさんの壺が飾ってあります。六年前にミカさんがお店を始めた時から、毎月、毎月、絵の違う壺を作り続けてきました。一番最初に作った蛸の絵の壺から、今月のいちじくの壺まで、そのすべてが順番に並んでいます。タテに12段の棚が、今では6列になりました。絵の違う壺が70個も並ぶ棚は、とてみにぎやかで、壮観な景色です。

蒸し焼き野菜入りのフライパンコーナーには、こんな貼紙があります。

【どんなに頼まれても、蛸焼きだけは、できません】

ミカさんは、このところずっと寝不足です。ハッチやチッチのように、手が八本あったらどんなによいかしら！ とつくづく思っています。

(あらあー...でも、どれが手で、どれが足かしら?)

おかげでハッチとチッチはちょっと寂しいのです。以前のように、噴水広場でミカさんが一緒に遊んでくれたらなあーと、二匹並んでため息をついています。

ミカさんは、くるみちゃんとそうすけくんに、美味しい蒸し焼き野菜をご馳走してくれました。おとうさんの掌ほどの赤茶色のフライパンに、かぼちゃとトマトと白インゲンマメと赤のパプリカが、ほかほかと入っていました。

「ムシヤキフライパンて、虫を焼いたのかと思っちゃった。だから蓋を開けるまでドキドキしてたけど、かぼちゃ、美味しいね。ミカさん」

「美味しいでしょ。これを食べれば元気百倍よ！」

くるみちゃんはほかほかの焼きかぼちゃを食べながら、今日は遊ばないで、かあさんへのプレゼントを探しに来たことを、ミカさんに話しました。

「そうよね。今日は、くるみのかあさんのパーティーだものね」

「エミリー!!!」

くるみちゃんとミカさんは同時にエミリーのことを思い出して、大きな声で叫びました。

「たいへーん！ エミリーを起こさなきゃあー」と、ミカさん。

「早く起こしに行かなくちゃ！」と、くるみちゃん。

くるみちゃんは、残りの野菜を口いっぱい詰め込みながら、ふと、そうすけくんのほうを見ると、

「あら、やだ！ そうすけくんったら、何してんの？」

ハッチが八本の手を広げてベターツとのびています。

そうすけくんはチツチをおんぶしながら、笑い転げていました。

ハッチの手の吸盤にありとあらゆる小さな物がくっついてあり、ハッチは身動きできません。消しゴムや鉛筆、茄子のヘタやプチトマト、丸めた紙やスプーンやフォーク、ハサミやホチキス、その辺にある小さな物を、次から次へと吸盤にくっつけしまったのです。

「まったく、いつのまにこんなことを…」

ミカさんは、目がまんまるになっています。

くるみちゃんはおかしくて笑いたいのですが、口の中には野菜がいっぱいで、どうにもなりません。

そうすけくんは笑いながら、スカートを掴むようにブカブカシャツをつまんで

「ごめんあそばせ」とおどけています。

とうとう二人はふきだしてしまいました。

「そうすけ！ ハッチにちゃんと謝って、もとに戻してあげてね。それから、店番頼んだよ」

そういうと、ミカさんとくるみちゃんは蝸壺の店を飛び出し、エミリーの店に走りました。

第6章へ

## 第6章 寝坊介エミリー

---

エミリーはパンとケーキの店《お寝坊パン》をやっています。

その名前の通り、とってお寝坊なので、パン屋さんなのに午前中はいつも閉まっています。パン、ケーキ、クッキー、なんでもとびきり美味しいのですが、なんせ、朝は起きません。いつもお店のドアの外には、たくさんの予約の貼紙が貼ってあり、たとえお店が開いたとしても、すぐに売り切れてしまうので、一日のうちにお店が開店している時間は、せいぜい2、3時間。エミリーがお店に貼った貼紙は2枚しかありません。

【予約は早め、早め、早めじゃないと間に合いません】

【深夜映画のビデオ貸してあげます】の2枚だけです。

エミリーは映画を観るのが大好き。深夜、世間が寝静まった頃、横町にエミリーの笑い声や叫び声が響き渡ります。あまり笑い声が続く時には、目が覚めた近所の人寝巻にガウンをひっかけて、眠い目をこすりながらエミリーの部屋へやって来ます。

どんなに面白い映画なのか気になって眠れないからです。それに、美味しいチョコレートやクッキーを食べながら、「ガハハハ」と大きな声で笑うエミリーと一緒に映画を観るのは、とても楽しいのです。

しかし、朝になってもグーグー寝ているエミリーとは違い、みんなはさっさと起きて働きます。そんな時エミリーは「ちゃんと夜中寝ていれば良かった…」と後悔します。

しかも、お菓子をたくさん食べてしまって、一日中、胃が重い…と、二度目の後悔をするのです。

くるみちゃんとミカさんはエミリーの店の前まで来ました。いつもより、たくさんの貼紙が貼ってあります。

【チョコチップクッキーにリボンを付けて、2袋お願いします】

【今日はどうしてもクリームパンが食べたいの】

【いつもの葡萄パン、必ずとっておいてください】などなど……10枚ぐらいあります。みんなお客様の注文です。

ベタベタとたくさん貼ってある貼紙を慎重にはがし、くるみちゃんとミカさんは裏庭にまわって、倉庫の上の階段を上がっていきます。倉庫には生みたて卵や、朝しぼった牛乳、小麦粉などがちゃんと届けてあり、出番はいまか、いまかと待っています。

エミリーは、スッポリ毛布にくるまって寝ていました。お腹の上には、猫のマープルがちょこんと乗っています。エミリーがスーと息を吸うと、マープルもスーと下に下がり、フーと息をは

くと、マーブルもフーと上がってきます。

くるみちゃんは、マーブルを抱っこして、エミリーの体に馬乗りになり、

「は一やーく、起きないと、もったいないおぼけがでるぞー」

と、大声を出しながら、ピョンピョンしました。

「ゲェー、なんだよ、くるみかあ、ゲェー、もおー」

と、エミリーは毛布に潜ってしまいました。

「エミリー、起きて！ 起きてよおー。今日は約束の日だよ。わかってる？ ねえ、ねえ、エミリー」

「うるさいチビだねえ、わかってるよ、忘れてないよ」

「チビじゃないもん。もう、くるみはお姉さんだよ。朝早くから、ちゃーんと起きてるもん」

「はい。はい。わかりましたよ」

すかさずミカさんも

「エミリー、注文の貼紙がたくさん貼ってあったから、ほら、持って来たわよ。それに、今日  
はくるみのかあさんのために、特大バースデーケーキを作るんでしょ。手伝うから、早く起  
きて！」

フラフラしながら、やっと起きあがりました。

エミリーは早速、髪を綺麗に束ね、サッサと白衣に着替えて仕事にかかります。仕事となると、  
早いのです。

オーブンに火を入れ、電動ミキサーのスイッチをONにして、注文の貼紙をコルク板にきちんと並  
べて貼っていきます。

寝る前に仕込んでおいたパン種を、計っては丸め、計っては丸め、寝坊介が別人のように、軽  
いフットワークで、体をクルクルと動かしています。

倉庫から重い小麦粉の袋を軽々運びます。卵は手に持ったが早いか、片手でポンと割って、ペコ  
ツとボールに入れて、卵の殻をスイッとバケツに入れていきます。

くるみちゃんはエミリーの動きに合わせて「ポン、ペコツ、スイーッ」と、リズム良く口に出し  
て言ってみました。

ミキサーには、バターや砂糖がどんどん入れられ、卵もヌルリ、ヌルリと混ざっていきます。エミリーは、くるみちゃんが覗いたりウロウロしていても、まるで目に入らない様子で、唇をきゅっと結び、醗酵したパン種のガスを抜いて、銀色に光る四角いヘラのようなもので、パン種を切ってはハカリの上に乗せ、クルクルツと丸めていきます。ハカリの針はゼロに戻ったり、120の所へ行ったり、セヨヨン、セヨヨンと、バネがなります。何回乗せても、ちゃ〜んと120の所へ行きます。

くるみちゃんは、今度は小さな声で「セヨヨン、セヨヨン」と言ってみました。

丸めて並べたパンのトレイがいっぱいになると、エミリーは次にもっと大きなパンを作り始めました。ハカリの針はセヨヨンと200を指しました。冷凍庫から出したクッキーの生地を絞り出してオーブンに入れたり、大きなボールにチョコチップを入れて溶かしたり、くるみちゃんの顔ぐらいある泡立て器で、シャツシャツとクリームを混ぜたり...くるみちゃんは目が回りそうでした。

ミカさんは、エミリーが形を作ったクッキーに干し葡萄ををのせています。いつも食べ慣れたクッキーです。お寝坊パンで一番人気の〔ご機嫌クッキー〕はエミリーの似顔絵になっていて、ニッコリ笑った顔の目の部分が干し葡萄で出来ています。ミカさんは2粒の干し葡萄を離れ過ぎないように、そして近づけすぎないように注意しながら、かわいい顔の〔ご機嫌クッキー〕を作っています。

最初のパンが焼ける頃には、香ばしい匂いや、カスタードクリームの甘い匂いが立ち込めてきて、くるみちゃんはどれもこれも食べたくなってしまいました。

裏口倉庫のドアから、ポリーさんが入ってきました。

ポリーさんは、横町で《ハフハフハーブ》というハーブティのお店をしています。ラクダ山の麓にポリーさんのハーブ畑があり、毎朝早くから、犬のユズちゃんと畑へ行き、朝露に濡れた新鮮なハーブやベリー、可愛らしい花を必要なだけ摘んでくるのです。

《ハフハフハーブ》での仕込みが終わると、必ずエミリーのお店に、綺麗に洗ったハーブやベリーをカゴいっぱい届けてくれます。毎朝のことなので、ポリーさんは、エミリーと特におしゃべりするわけでもなく（エミリーはまだベッドでスヤスヤ...?）、紙を敷いたバットにハーブやベリーなど並べ、冷蔵庫へ入れておきます。

ついでに、小さな花束をお店に飾ってくれます。ポリーさんのハーブは、エミリー特製の雑穀パンやピザになり、色々なベリーは、ケーキの中身や飾りとして、たっぷり使われるのです。

とりわけ、ベリーベリーサンキュウタルトは大人気です。

こぼれ落ちる程にのせられた新鮮なベリーと、甘いクリーム、バターたっぷりのタルト生地が織り成すハーモニーは、絶品です。

「そういえばミカさん、そうすけくんが蝸壺のお店の前にしゃがんで、ハッチとあやとりしていたわよ」

「おーっと、いけない。私、そうすけのことすっかり忘れちゃったわ。一度店に戻ってくるわ。ね、エミリー」

「そうだ、わたしもかあさんのプレゼントを探すんだった！」

くるみちゃんは、とうさんはどうしたかな？と、ちょっと不安になってきました。エミリーができたてホカホカのクリームパンを二つ袋に入れながら

「くるみー、マダムの店に行ってみたら？ あそこには、くるみのママが欲しがりそうなものがたくさんあるわよ。きっと見つかるよ。ステキなプレゼント」と言って、くるみちゃんの肩をポンと叩きました。

「くるみちゃん、デイジーはユズと仲良くうちの店の前にゴロンしてるよ。安心してね」ポリーさんも笑顔でくるみちゃんを励ましてくれました。

くるみちゃんとミカさんが《蝸壺》まで戻ってみると、そうすけくんは、まだ店先にしゃがんでハッチとあやとりをしていました。

「そうすけ、店番ご苦労さま。遅くなっちゃって、ごめんね。えーっと、チッチはどこかしら」

「さっき、外の石壁を上ったり下りたり、店の前を通る人に手を振ったりしていたけど…。

僕が、それだけ何本も手があるんだから、いっぺんに手を振ったらカッコイイよ、って言ったんだ。ずいぶん練習していたみたいだけど…」

3人とハッチはキョロキョロしてチッチを探しました。

「ねえ、そうすけくん、私、マダムの店に行ってみようと思うの。そうすけくん一緒に行く？」

「じゃ、行くか。ハッチ、またな！ あっ、そういえば、壺が一つ売れたよ」

「あら、ありがとう。どの壺かしら？」

「入口の傍にあった、ワカメみたいな絵の付いたやつ」

「ワカメ？ やだ、失礼しちゃうわ。あれは珊瑚礁の絵よ。やだ、やだ。どうしよう。あれは、チッチが大好きな壺だったの。チッチ入っていなかった？」

「ぼく、中を見なかったよ。だって、おじさんが包まなくてそのままでもいいって言ったから、中まで見なかったよ」

「どんなおじさん？ 知っている人？」

「知らない。初めて見るおじさんだった。えーっと、あごにひげがあって、背が高くて、あっ、そうだ。時計屋さんはどっちかな？ って聞かれたから、僕、カチコチウオッチはすぐそこだよ、って言ったんだ」

「よーーしっ」

ミカさんは走りだしましたが、すぐに、そのままバックして戻ってきました。こちらに向かって、おじさんがグーンと、壺を突き出して走って来たのです。その壺の中で、チッチが手を3本同時に振っていました。

「キミ、キミ、キミ、君の店の壺には、蛸が入っているのかねえ。僕は、壺だけでいいんだがねー。その、なんだ…。このように、なんだかちよっと、ヌルリとしたものは、実は苦手なんだ。だいいち、キミ、この蛸ときたら一体何をしているのかね？ さっきからこの僕に向かって、手だか足だかわからんが、これをしきりに振るんだよ。キミ、なんとかしてくれたまえ」ミカさんは、お客さんに丁寧に説明してわかってもらいました。

「今日はいろいろなことがある日だなあー」

グチャグチャな髪に、ダブダブなシャツを着たそうすけくんが、あまりに大人びたことを言ったので、おじさんとミカさんは大笑いしてしまいました。つられて、そうすけくんとくるみちゃんも笑ってしまいました。

## 第7章 マダムの悪魔のコレクション

---

くるみちゃんは、いつまでもニヒヒと笑っているそうすけくんのシャツを引っ張り、マダムの店へ向かいました。

マダムの店は《テネシーワルツ》というアンティークのお店です。

お店の横には古い街灯があり、その下には教会で使っていた10人以上も座れるような大きな木の椅子が置かれています。そのベンチにくるみちゃんのかあさんが座っていました。

チコさんも、トモコさんもいます。

カチコチウオッチのヒデコさんも、何かおしゃべりをしています。

マダム達はヒデコさんの面白い話を聞き逃さないようにピッタリとくっついて座り、まるでゼンマイ仕掛けのおモチャの人形のように、急にピタッと動きが止まったかと思うと、今度は前屈みになってから、ガハハーと声を揃えて後ろにのけぞり、大笑いしているのです。

笑いすぎて涙をフキフキ針仕事をしているチコさん。

同じ所を何度も編んだり解いたりしながら笑っているトモコさん。おかげで仕事はサッパリはかどりません。

くるみちゃんのかあさんは、両手で口を押さえたり、お腹を押さえたりして、笑っています。いつだってヒデコさんの話はメチャクチャ面白いのです。

くるみちゃん達が《テネシーワルツ》の前まで来ていても、誰一人気づきません。おしゃべりと大笑いに夢中です。《テネシーワルツ》の店の入口に、例の秘密のマーク入りの貼紙が貼ってあるのをくるみちゃんは見つけました。その貼紙には

【こちらはまだです。そちらは？ ケロケロ】と書かれていました。

くるみちゃんは、かあさんに見つからないように、そっと貼紙を剥がしてポケットに入れました。

「とうさんも、まだ見つからないんだあ...」

かあさんへのプレゼントは、今までにも何度か貼紙横町へ探しに来たけれど、見つけれずに、とうとう今日になってしまったのです。

くるみちゃんは唇をキュッと結び、おでこの真ん中に力を入れて

「良いものが、見つかりますように！」

そう願いながら《テネシーワルツ》のドアを開けて、そうすけくんと中へ入って行きました。

明るい外から入った店の中は、暗闇のようです。二人は立ち止まりました。

古い蓄音機からジャズが流れ、天井や壁にはたくさんのシャンデリアがありますが、月明かりのように柔らかで、キラキラしすぎてはいません。二人の目が暗闇に慣れてきた時、壁から誰だかわらない顔が浮かび上がってきました。

それは、壁に飾られた古い肖像画でした。他にも、暗い森の絵や、嵐の海の絵もあります。

ゴブラン織のクッションや壁掛けが並べてある棚、銀食器ばかりの棚もあります。

古い家具はチョコレートのような色をしていました。

飾りがたくさん付いた豪華なミシン。足が付いた三段重ねの大きな裁縫箱の中には、色とりどりの糸巻きがきちんと並んで入っています。

お裁縫の道具はどれも美しく、幅を違えたりボンもたくさんありました。

ねずみの形の針刺しや、綺麗に花の絵が描いてある指抜き、どれもこれもかあさんの裁縫箱にはないものばかりです。

すずらんやすみれが描かれた、紅茶のカップやスプーンもステキでした。

硝子ケースの中には、アクセサリがたくさんありました。

ネックレス、イヤリング、ブレスレット、時計にブローチ、髪飾りやフワフワした花がたくさん付いた帽子。

ハンドバッグは小さなものから、お医者さんが持つような大きなカバンもあります。マントやコート、傘や靴、毛皮、赤ちゃんが教会へ行く時に着るレースのドレス、お菓子のよう可愛い靴

。

次から次へと目に飛び込んでくる物のひとつひとつは、昔から大切に扱われてきたものばかりです。

くるみちゃんは、目に飛び込んでくるすべての物に圧倒されていました。

そうすけくんは、マダムが大切にしている悪魔のコレクションのコーナーの前で、何かぶつぶつと独り言を言っています。くるみちゃんは恐いので、そちらの方は見ないようにしていますが、なんだか誰かに、じっと見られているみたいで、落ち着きません。

くるみちゃんは辺りを見回しました。

古い蓄音機の隣には、丸テーブルがあります。その上に、子猿が本を読んでいるブロンズの置物があり、すぐ隣には親猿がカンテラをぶらさげて、子猿の本を照らしているランプがありました。テーブルの前には、マダムが毎日ドツカリと座っている、大きな緑色の革の椅子が置いてあります。

その椅子の右側の肘かけには、マダムの愛猫シータちゃんが、左側にはくるみちゃんの猫のアビルが、ちょこんと座っていました。まるで王座を守るライオンのように、前足をきちっと揃えて、ピクリとも動きません。目を閉じ静かに座っています。

「アビル！ 知らん顔しちゃって。もう、人形かと思っちゃったよ。」

くるみちゃんが傍に行って頭を撫でてでも、アビルは耳さえ動かさそうとはしないのです。きっと、シータちゃんとどちらが長く人形のフリをして座ってられるかを、競争しているのに違いありません。

「ねえ、そうすけくん。さっきから、ずいぶん静かにしているね。どうしたの？」

「あのさー、なんだか僕、すごく古い物に囲まれていて、息がうまくお腹の方に入ってこないみたいな、てんで変な気持ちなんだ」

「そうだよ。なんか昔に迷い込んだような気持ちになるよね。落ち着かないし、変な気持ち...」

その時です。店の奥に置いてある、大きな振り子時計のネジが

「ギー、ジイー、ギー」と音を出しました。

不気味な音に、二人は思わずしがみつきながら、腰が抜けたようにマダムの大きな椅子にスッポリと飲み込まれてしまいました。

椅子は二人が座っても、まだたっぷり余裕があります。

両方の肘かけに座った二匹の猫は.....

何も聞こえません。

何も見ていません。

だって人形ですもの。

と言わんばかりに、しっぽの先まで固まっています。

「ねえ、そうすけくん。何かに深く静められている気がしない？」

「なんかさ、椅子が深いね。かあさんが言っていたよ。マダムは町一番大きな女の人だけど、まだまだでかくなるんだって！ マダムはね、いつも音楽を聞きながらこの椅子に座って、じつと古い物を眺めているんだって。そしてどんどんでかくなっているんだってさ。だから僕にも言うんだ。ちょっとはじつとしていたら...ってね。でも僕、どうやったって、マダムのような大きさにはなれないと思うよ。きっと、なんかこの店の中にいるんだよ！ 変なものがあるんだよ」

「やめてよ、そうすけくん！ さっきからたくさんの悪魔の人形がこっちを見ていて怖いんだよ。それに頭の上見て！ ほら！ あの天井のランプ。あれ見て！ 怖いよ！ あれも悪魔のコレクションかなあ」

「僕だって、なんだか、おしりがスースーするんだよ。あのさ、僕、噴水に落ちただろ。だ

から、その時全部脱いじゃって、貸してもらったシャツの下にパンツ履いてないんだ。でへへへー」

「やだ、そうすけくん。もう、変な笑い方しないでよ」

その時です。さっき「ギー、ジューギー」と音がした大時計が

「ジジジリゴオオオン、ゴオオオオン」と鐘を打ち鳴らし始めました。

それは耳だけではなく、体中の骨に伝わる音でした。

二人は目をギョツとつぶり、体を小さく丸めてしがみつきながら固まってしまいました。

## 第7章 マダムの悪魔のコレクション

---

時計の鐘の音はとてもゆっくりなので、くるみちゃんは、もう終わりかな？ まだ鳴るのかな？

早く鳴り終わらないかな...と何度も考えました。

「ジコジコジジジゴーン。ジジジゼゼゼゴーン」.....一体いくつなるんだろう。

ギシシという音とともに、扉が開く音がしました。

そうすけくんがピクリと揺れたので、くるみちゃんはもっと恐くなって、もうこれ以上小さくなれないほどに縮まって、目をギュッと閉じました。

フー フーと荒い息遣いが聞こえてきて、生暖かい空気が近づいてきます。そうすけくんはくるみちゃんが丸まっているお腹の辺りにむりやり頭を突っ込んできました。くるみちゃんは、冷汗なのか、暑いのか、寒いのかさえ、わからなくなってしまい、汗びっしょりなのに震えています。

「おーや」低い声が聞こえました。床が揺れています。

「ほーれ」何かペタリとした物が二人の頭を同時に触りました。

そうすけ君が小さく「キュッ」と言いました。

ペタリとした温かい物は「チチチチュー」とくるみちゃんの顔をベロリと舐めました。

「ヒィィ、ヒェー」くるみちゃんはたまらなくなり、悲鳴をあげました。

もう縮こまっているのも苦しくて、おそるおそる頭をあげながら薄目を開けてみました。

目の前は真っ暗です。

小さな悪魔が、クシャミををしながら、銀の糸にぶら下がって揺れていたのです。

二人は同時に悲鳴をあげると、温かくて柔らかな物にぶつかりながら、転がるようにドアの方へ逃げて行きました。あと少し、という所まで来た時、そうすけくんは自分が着ているダブダブシャツを踏んでしまい、もがいても、もがいても、前へ進めません。

くるみちゃんは、そうすけくんのシャツの首の所を掴むと思いつき引っ張り、ドアの外へと転がり出しました。

外は明るい陽射しがいっぱい、目がチカチカします。

「と、と、とにかく深呼吸、深呼吸」くるみちゃんは自分の胸をさすりました。

そうすけくんはポカンと口を開けています。

二人はドアに寄り掛かり、目が光に慣れるのを待っていると、いきなり、ドアがガクンと後ろに引かれ、二人同時に、座ったままの姿で後ろに転がってしまいました。

「あらあら、まあまあ、出て行く時も面白かったけど、また転がって入って来たのね。ガーハッハッハ、まったく、子供って面白いわ。ガーッハッハッハ」

くるみちゃんは寝転がったまま、声のする方を見上げました。そこには大きな体にスッポリと黒のロングドレスを着て、首から銀のネックレスをしたマダムが立っていました。マダムの胸がふーわ、ふーわと動く度に、銀のネックレスの先にぶら下がったクシャミをしている悪魔が、キラリ、キラリと揺れています。

「おチビ達、どうしたの？ 寝ぼけたのね？ くるみちゃんのかあさんから貼紙を預かったの。ドアに貼っておいたわよ。それからそうすけくん、お尻が丸見えよ。まあ、可愛いからいいけどね。イーヒッヒッヒッヒー」  
そう言ってマダムは、店の奥へミシミシと戻ってしまいました。

くるみちゃんとそうすけくんは、夢を見た気分です。もう一度外へ出ました。マダムの店のドアには、さっきまでおしゃべりしていたかあさんの貼紙がありました。

【くるみへ。とうさんと待ち合わせをしているので、かあさんは《ヨウコソ・ヨウコソ》へ行きます。かあさん達は11時位からお昼前まで、そこにいるからね】

くるみちゃんは頭がボーツとしたままです。  
そうすけくんは？ と隣を見ると、シャツの裾を足に挟んでみたり、結んでみたりして、丸見えになったお尻を一生懸命隠そうとしています。

「そうすけくん、何してるの？」

「これ、何とかならないかと思ってさ」

「何とかなる？」

「どうする？ これクチャクチャになっちゃった！ デヘヘー」

「フフフー、おかしなそうすけくん！」

二人は、何かから解き放されたように、ゲラゲラと笑い転げました。

「はあーおかしかったあー、何だか笑ったらスッキリしちゃった！ ところで、今何時かな？」

二人は並んで立ち、鼻の頭をウインドーに擦り付けるようにして、マダムの店の中の大時計を見ました。

「うわあー、もう、11時をとっくに過ぎてる！　じゃ、さっきゴーン・ゴーンと鳴ったのは11時だったんだ」

「やっぱり、さっき、時計が鳴ったよね。僕起きていたよね。夢じゃないよね。なんかあー見た？　くるみいー、さっきなんか見なかった？」

「何だか、わらなくなっちゃった。さっきは確かに何か見たと思ったけど。笑ったらわらなくなっちゃったよ」

店の中の例のあの椅子には、マダムがドツカリと座り、膝の上ではシータちゃんとアビルが仲良く重なるように丸まっています。マダムのおでこには、貼紙が貼ってありました。

【休憩中です。またあとでね】

貼紙はマダムの鼻息でリズムよく、ひらひら揺れていました。

「あれ？　ウインクしたよ！　したよね？」

マダムの胸にぶら下がった銀のクシャミ悪魔が、確かに今、キラリと光りながら.....

「た・し・か・に今...。駄目だ、もう行こう。ダメダメ見ちゃダメ！」

第8章へ

## 第8章 迷路怪物・ヨウコソ・ヨウコソ

---

こんどは、そうすけくんがくるみちゃんを引っ張って。足早に進みました。

スパイシーインド風料理とスパイシーなカカオの店《アンデス・インダス》の前にKENさんの自転車が止めてありました。

茶色のボディに濃い茶色の革のサドル、横にサイドカーが付いています。

サイドカーには蛇腹になったベージュの幌があり、| BOOK'S SILENT | と焦げ茶色で染め抜いてあります。

サドルの上では、《アンデス・インダス》の猫のココが日向ぼっこをしていました。

お店を覗くと、月子さんが小さなチョコレートがたくさん並べて、一粒一粒に細かく絵を描いています。

この店のチョコには、唐辛子やコショウなどの香辛料、ブランデーやウィスキーなど大人の大好きな物が詰まっています。チョコレートの形や表面の絵も美しく、箱にも月子さんの絵が描いてあり、宝石箱のようにきれいです。くるみちゃんはもちろんまだ一つも食べた事ありません。そうすけくんは、夜になるとウララさんがブランデーと一緒にチョコッと摘んでいるのがとても羨ましくて、一度だけこっそり食べた事があると、自慢していました。

KENさんは奥のカウンターで一人、かおるこさんが作ったひよこ豆のカレーを食べていました。

「KENたん！」

「むん…」KENさんは言ったか言わなかったのか。

そんな曖昧な返事をして、くるみちゃんとそうすけくんを見ました。

「KENたん、ヨウコソ・ヨウコソまで、乗せて行って」

「むん」

KENさんは、「何故？」とか「どうしたの？」なんて一切聞きません。

それに、「駄目」とか「いいよ」とかも言いません。

たまにはしゃべりますが、たまに...なのです。

KENさんはかあさんの弟です。

くるみちゃんは、赤ちゃんの時からKENたんが好き。

「むん」としか言わないKENさんと、静かに仲良く何時間も遊びます。

KENさんは黙って自転車を指差し、黙々とひよこ豆のカレーを食べ続けています。

くるみちゃんは、《ヨウコソ・ヨウコソ》で何か買う物があつたか、思い出す事にしました。

そうすけくんは猫のココに染みついているチョコレートの香りを全部吸い込むつもりで、ココのお腹に顔をくっつけて、パフパフしています。

ほどなくしてKENさんが店から出てきました。

サイドカーの幌をたたみ、中に入れてあった数冊の本を自分のリュックに入れ、かわりにくるみちゃんとそうすけくんと、ポイッポイッと、サイドカーに乗せて走りだしました。

サイドカーは、スピードを出すとゴツゴツと揺れてお尻が痛いのですが、今日は二人ともギュッとくっついているので、同じように揺れるのがおかしくてたまりません。

隣でそうすけくんが「ゴーゴーデンデン、ゴーゴーデンデン」と歌っています。

スピードを出すと、サイドカーの幌がデンデンと鳴るからです。

小さな時からKENさんに何度もせがんで乗せてもらっているサイドカー。

いつもはKENさんがくるみちゃんのためにクッションをたくさん詰めてくれます。

かわいいゴム付きのサングラスも帽子も被せてくれます。

今日は初めてそうすけくんと二人で乗りました。いつもと景色が違って見えます。

ラクダ山から流れ出た川の水は、貼紙横町の真ん中を通り、噴水の水になり、また川に戻りながら海へと流れていきます。

気持ちの良い風に吹かれながら、くみちゃんは海の匂いを感じています。

《ヨウコソ・ヨウコソ》は、貼紙横町と海の間にあります。本当は《オデールの店》という名前なのです。今の店主のオデルさんの、ひいお爺さんの時代に開店しました。

そのひいお爺さんは、いつもニコニコ「ヨウコソ・ヨウコソ」と言っていたので、長い間に、誰からともなく《ヨウコソ・ヨウコソ》と呼ばれるようになりました。

今の店主のオデルさんは男だらけの7人兄弟で、それぞれにお嫁さんがいます。

このファミリーは、ひいお爺さんの時代から素晴らしく働き者で、一家で力を合わせて一日中クルクルと働いています。

店は、ひいお爺さんが建てたままの、木造の小さなもので、磨きあげられた床はすり減り、ギシギシとなります。

店に置いてあるものは、ひいお爺さんの時代の日用雑貨品など、今では使われない物ばかりです。オデル兄弟7人と嫁7人は、それを大切な宝物のように、自慢して飾っています。

お客さんは店のカウンターへ行って、希望の品物を言えばよいのです。

とにかくなんでもあるんですもの。

古い姿の小さな店の裏には、巨大な迷路のように継ぎ足し倉庫がモコモコとあり、どんな注文でも

「あーはいはい。すぐお持ちしますよ」

と言うが早いか、希望の品物が出てくるのです。

歯ブラシだって、釘だって、小麦粉だって、布地だって、石鹼だって、鉛筆だって、煙突だって、エンドウ豆だって、燕尾服だってあるんです。

お客さんから注文が入れば、どんなものでも探して仕入れてきます。仕入れた物を入れる倉庫がなくなれば、オデル兄弟嫁7人、力を合わせ、トンテンカンテン・トンテンカンテン、一晩の

内に新しい小屋を建ててしまいます。

日用雑貨品は次男夫婦。家具や材木は三男夫婦。薬や化粧品は四男夫婦。布地や衣料品や靴は五男夫婦。農産物は六男夫婦。海産物は七男夫婦が担当しています。

その他の、配達や畑の世話、店の掃除や青空テントでのジューススタンドやフィッシュフライ、花や苗木などは、オデル兄弟嫁7人の子供や孫達が担当しています。

とにかくゼーンぶ間違いなく、オデルさんです。

《ヨウコソ・ヨウコソ》の裏には、迷子になりそうなほど、たくさんの小屋がモコモコとあるので、そんなオデルさんの店をラクダ山から見ると、ウロコがたくさんある怪物のように見えるのです。

小屋の後ろは、オデルさんの畑になっていて、畑の横のロバ小屋では、2頭のロバが暮らしています。

ロバは最初〈青空号〉と〈そよ風号〉と呼ばれていました。しかし配達の途中で草むらを見つけると、モグモクと食べ始めてしまい、ソーレ・ソーレといくら声をかけても、にっちもさっちも、どうにもこうにも、動きません。

そのうちロバ達は〈ニッチモ〉と〈サッチモ〉と呼ばれるようになりました。

その名前になった途端、ロバ達は小屋からも出てこなくなり、一日中ロバ小屋の前の柵に前足をかけてあくびをしたり、下の歯を右、上の歯を左、右の耳は後ろ、左の耳は前など、お互い見つめ合っては、つまらない事をして、ヒーヒッヒッヒッヒッヒーと笑うばかりで、ちっとも働かなくなってしまいました。

困ったオデル兄弟嫁7人は、頭を寄せ合い考えました。

願いを込めて〈ぐんぐん〉と〈ずんずん〉という名前に変えてみました。

するとどうでしょう。

今度は働き者のオデルファミリーにピッタリの、ぐんぐんずんずん・ぐんぐんずんずん働くロバに変身したのです。

これで安心！ 〈ぐんぐん〉と〈ずんずん〉は、重たい材木でもなんのその。

ラクダ山のとっぺんだってなんのその。元気に配達をしています。

くるみちゃんとそうすけくんをオデルの店の前で降ろすと、KENさんは一番に店の中へ入って行き、なにやら小さな包みをそうすけくんに「むん」と言って渡すと帰ってしまいました。そうすけくんは袋を覗いて

「はあー、たすかったあー。パンツ入ってる。くるみ、パンツってさ、たいしたことないとおもうけどさ、やっぱりパンツはすごいよ。でも、どうしてわかったんだろう？」

そうすけくんは、パンツはすごい、パンツはすごいと喜んでいます。

くるみちゃんはどうさんとかあさんを探しましたが、見当たりません。その変わりにかあさんの貼紙を見つけました。

【一番大きな材木の倉庫に行きます。注文があれば、貼紙に書いて、オデルさんに渡しなさい。後で他の荷物と一緒に運んでもらいます。それから、好きなジュースを頼んで、飲んでいいのよ】

と書いてあったので、二人は新鮮野菜や、ジューススタンドが並ぶテントへと歩いて行きました。くるみちゃんは、〈三種類の林檎ジュース〉、特に青林檎多めを頼みました。そうすけくんは、〈メロンジュース・マンゴーの実ゴロゴロ〉を頼み「くーっ、うめーっ、くーっ」と言いながら、飲んで咳込み、また飲んで「息吸うのわすれた！」と胸をトントン叩いています。

くるみちゃんは息を吸うのを忘れるって...どうすればいいのかな？と息を止めてジュースを飲もうとしましたが、どうしてもジュースを飲む事ができません。何度も息を止めてやり直しを試みましたが、だんだん苦しくなり、目玉が真ん中に寄るばかりで駄目でした。

そうすけくんはすごい事ができるんだなあー、と感心してしまいました。

## 第8章 迷路怪物・ヨウコソ・ヨウコソ

二人は、ジュースを取り替えっこして飲んでみたり、いつも野菜テントにいる双子のお姉さんと遊んだりして、買物するのをすっかり忘れてしまいました。

「大きなスイカをちょうだいな。特別に大きなのがいいわ。今日は孫が遊びに来るんでね、甘いのをお願いね。それから、孫にクレヨンと浮輪を買いたいので、ちょっと見せてもらって来るわ」と白髪のおばあさんが買物に来たので、

「あっ、いけない。買物しにきたんだ。それに、とうさんとかあさん！ 忘れちゃった」

くるみちゃんは、そうすけくんの肩を叩いたり、飛び上がったたり、大騒ぎしてしまいました。

「早く、早く、そうすけくん！ はやくう。お店に戻らなきゃ」

くるみちゃんは、そうすけくんの手を引っ張り、走ってお店に戻ると、肩からぶら下げたカエルのアップリケが付いた袋を開けて、秘密のマーク入りではない、普通の貼紙束から、1枚紙を取り出し、...くるみ...と、かあさんが名前を彫ってくれた黄色い鉛筆を握りしめ、【おりがみ1つがようし10まい えのぐのきいろとしろとぴんく1本ずつ.....くるみ】

と書いて、カウンターへ行き、背伸びをしてオデールさんに渡しました。

カウンターにいるオデールさんはでっぴりと太っています。おでこがピカピカしていて、ほっぺが赤くて、鼻がとても大きな人です。

太いグリーンの縦縞のシャツの上に、真っ赤なズボン吊りのバンドをしていて、赤い蝶ネクタイをしています。オデールさんは、甲高い大きな声で

「はい、はい、はい、じょうちゃん、ぼっちゃん、はいはい、ようこそ。はい、はい、折り紙、絵の具に画用紙ね。おじさんがね、このベルをね、ほら、ここにあるだろ。このベルをね、チーン、チーンと2回鳴らすとね、ほらね、後ろのドアから直ぐに誰か出てくるよ。ほーら来た！ はいはい、注文の品物を出して来てちょうだいね。はいはい」

出て来たのは痩せているおじさんでした。でも、蝶ネクタイと鼻が大きいところは、太ったおじさんと同じでした。

「私の買物は、とうさんやかあさんの買物と一緒に届けてください。それから、とうさんとかあさんが材木倉庫にいるので、そこに行きたいの」

「はいはい。あー、はいはい、わかりましたよ。くるみちゃんね。はいはい。材木倉庫は一番奥だ

よ。案内させようね。はいはい。うんじゃ、こっちだよ。ほら、みてごらん、おじさんがね、これ、ほら、今度はね、こっちだよ、デカイほうさ。カランカランと鳴らすとね、うちには若い元気者が数いるからねえ、すっ飛んで来るから、若いのに案内させますよ。はいはい。見ててごらん」

太ったオデールさんがニコニコしながら、大きなベルをカランカランと二つ振りました。

太ったオデールさんと、痩せたオデールさん、二人並んでニコニコしながら後ろのドアを見えています。バターンと威勢良くドアが開いて、背の高いお兄さんが入ってきました。黒っぽいシ

シャツを着ていますが、やはり赤い蝶ネクタイです。でも、それ以外はどちらのおじさんにも似ていません。

「はいはい。こちらのくるみちゃん達を材木倉庫まで、案内してあげてね。外から行く方がよかないかい？ 外のが明るいからねえ。子供さんには、その方がよかないかい？ ねえ」

「そりゃ、そうだ。そりゃそうだ」二人のおじさんは笑いながら頷き合っています。

若いお兄さんが

「じゃ、こちらへどうぞ！」

と、くるみちゃんとそうすけくんを連れて外へ出ようとした時です。

くるみちゃんはドアに貼ってある貼紙を見つけました。

そうです。あの秘密のマーク入り貼紙です。とうさんの貼紙です。

「私への貼紙があったわ」

そっと、ドアから剥がしました。

【化粧品コーナーへ行け！ ケロケロカエル】

とうさんが何かかあさんへのプレゼントを見つけたのかしら？ とワクワクしました。

「あの一。材木倉庫へ行く前に、化粧品コーナーへ行きたいです」

くるみちゃんは大きな声で、ハッキリと、若いお兄さんに言いました。

返事をしたのは、カウンターにいる甲高い声のオデールさんでした。

「おーや、はいはい。小さくたってねえ、そりゃ女の子はねえ、大好きだよねえ。はいはい。それじゃ案内はいらぬやねえ。そこの扉をあけりゃいいんだからねえ。次の部屋だよ。はいはい、どうぞ、はいはい」

今度はおじさん二人とお兄さんまでニコニコ笑いながら、くるみちゃんを見えています。

くるみちゃんはほっぺが少し赤くなってしまいました。

私のじゃないもん。かあさんにプレゼントをするんだもん。と心の中で思いました。

「僕、初めて入るよ。くるみ。どんな部屋かなあ。行こう！ 行こう！」

そうすけくんは興味津々です。

古ぼけた木のドアをあけてみると…。今までの店の雰囲気とは違い、とてもオシャレな部屋でした。壁にはたくさんの化粧品が飾られ、チェストや大きな鏡があり、レースで飾られた棚には色とりどりのブラシや手鏡、香水瓶がセンス良く並んでいます。

チェストの引出しは少しずつ開けてあり、ハンカチやスカーフ、小物を入れるポーチ等が入っています。

薔薇模様やすずらんの模様、スマレやひなぎくなど、花ごとに分けて展示しており、どれもドキドキするほど綺麗でした。

便せん、封筒、カードなどがあるコーナーに、ミモザの絵がついた香水瓶がひときわ目立つように置いてあります。その香水瓶に貼紙が貼ってあります。

【ケロケロ！ これどうだい？ ケッケロケー】とうさんです。

くるみちゃんもこの香水瓶を気に入りました。どんな香りかしら？ 香水と一緒にミモザの刺

繻のハンカチもつけたらどうかな？ きっと、かあさんが喜ぶだろうな、と思いました。

「そうすけくん。これ？ あれれ！ あれ、やったあー そうすけくん やだ。ぐーふっふっふっふはっはっはっはー」

くるみちゃんは笑いが止まりません。

そうすけくんときたら、化粧品お試しコーナーの鏡の前にドツカリとあぐらを組んで座り、頬紅、口紅、アイシャドー、なんと、ツケマツゲまでして、得意顔です。

キョロキョロと、ハンカチやレースに見とれている間に、もうイタズラをしていました。

「どうしたの？ あーおっかしいー けど、なんだかかわいいよ。どうやったの？ わたしもやってみたい。ねえ、そうすけくん、そうやってみると、ウララさんに似ているね」

「ほら、これ、つばつけると、くつつくよ」

そうすけくんはそう言うと、またツケマツゲで遊んでいます。

くるみちゃんも鼻の頭に付けてみたり、鼻の下に付けてみたり...だんだん楽しくなってきました。

頬紅、口紅、とったり、ついたり。まゆげにアイシャドー。楽しくて可笑しくて、椅子から転げ落ちては、また始めからやり直し。

そうすけくんは頭に造花を乗せて踊っています。

そんな時、ドアの向こうから数人の話し声が聞こえてきました。

二人は息を潜めて、ドアの隙間から誰が入ってくるかと覗いてみました。三人のおばあちゃんのお客さんでした。

「あっ、こっちにくる」

二人はとっさに、近くの物陰に隠れて、そっと様子をうかがいました。

「あらら、なんだかちらかっているわねえ」

おばあちゃん達は、どっこいしょと椅子に座ると、クリームを手に摩り込んだり、口紅をヌーッと塗っては上下の唇をパムパムと擦り合わせてみたり、おしゃべりに夢中です。二人が物陰から覗いていることなど気付きもしません。

二人はそっーと、隣の部屋に逃げこみました。飛び込んだ部屋は化粧品や日用品の倉庫でした。

歯ブラシの絵の付いた箱や、赤ちゃんの顔が描いてある可愛い汗とり粉の箱、石鹸の箱の大きさにはビックリしました。

「これ、ぜーんぶ石鹸だよ！ こんなにたくさんの石鹸見たの初めてだよ！ すっげー」

「そうすけくん、声が大きいよ。聞こえちゃうよ」

「あっと、いけない！ 聞こえちゃったかな？ でも、ばあちゃんたち話に夢中になってる。ほら、くるみ、あのばあちゃん見て！ ぼくらと同じようなことしてるよ。ほら」

「ぐーふ。ほんとだあ面白いね。でも、どうする？ 当分帰りそうもないしね」

「たいくつだなあ。この部屋暗いし、尻とりしながらばあちゃん達帰るのを待つ？」

「みて！ あっちにもドアがあるよ。出られるかもしれないよ」

「そうだね。行ってみよう」ドアを開けると、そこは、変わった形の部屋でした。

部屋の真ん中に、丸い大きな棚が床から天井まで連なっていて、その棚には、薬がビッシリと並んでいます。

くるみちゃんは、いつもおばあちゃんが頭の痛い時に飲む薬の箱を見つけました。

「あっ、これ知ってる。おばあちゃんの薬と同じだよ。頭痛いとき飲んでるよ。とうさんもお酒臭い朝に、時々飲んでるよ」

「ぼく、これ知ってるよ。やぎに耳噛まれたときつけた」

「あっ、これも知ってる。とうさんが足の指につけてる」

「ぐーふ、足の指ような薬なんてあるの？　へえー」

「あれえ！　この棚回るよ、ほら、グルグル動くよ」

大きな円形の棚はギンギンと音をたて、時々傾きながら部屋の真ん中で回っています。

ギッシリと詰められた小さな箱達がかたかたと揺れています。

「あれれ、くるみも一緒に回ってみて！　この部屋、ドアが5つあるよ」

くるみちゃんもそうすけくんの後ろから回ってみました。

「数えてみよう！」

「1、2、3、4、5、6　えっ6？」もう一度

「1、2、3、4、5」もう一度

「1、2、3、4、5」

「やっぱり、ドアが5つあるよ」

「さっき僕たち、どのドアからはいつてきた？」

「うーんと、たしか、ここ？　あれ？　こっちだった？　これかなあー、開けてみる？」

二人はドアを開けてみました。

床から天井まで隙間なく組まれた棚には、台所用品がギッシリと詰め込んであります。

大きな鍋から小さな鍋まで堆く重ねられ、誰が見たって幾つ重なっているのかを数えずにはいられません。

くるみちゃんは下から順番に数えてみました。

「1、2、3、4、5、6、7、8、9！　凄いよ！　凄いよ！　お鍋がニョキニョキって伸びていってるよ」

「僕も数えたいよ、上から順番に1鍋、2鍋、3鍋、あ、べーべーべー、4べー、5べー、6べー、7べー、なべなべなべなべ7べーべー」

「ねえ、そうすけくん、そうすけくんってば！　もういいよ！」

ピカピカ光る鍋の塔を見て興奮したそうすけくんは、すっかり調子ずいて腰を振りながら両手を合わせ鍋を拝んでいます。

「8べい、9べい、はあぁー　ピカピカ光る鍋神様！　いつも美味しい御飯をありがとうございますう」

「ありがとうございますうう」

くるみちゃんも、つつられて拝んでしまいました。

## 第8章 迷路怪物・ヨウコソ・ヨウコソ

---

反対側の壁にはギッシリとクギが打たれ、金や銀に光るたくさんのフライパンやおたまが、まるでおたまじゃくしのように、♪並べ！！ ドレミファソラシドーー♪と、唄うように小さい順にぶら下がっています。

「こんなにでっかいおたま、誰が使うんだろう？ 僕、あの一番でかい奴、自転車の後ろに付けて走りたいなあ。そうだ！ いい事思いついた！ プレゼント、あれにしたら！」

「えええ、ぜんぜんいい事じゃないよ。でかいおたまが欲しいのは、そうすけくんだけだよ」

「へえええ、そりゃまた、おったまげー」

「プレゼントで思い出した。早く探さなきゃ。外に出たいよ。どうする？ 戻った方が良いかなあ。もう少し先まで行ってみれば、外に出られるかなあ」

「この部屋にも、さっきの部屋と同じくらい、たくさんドアがあるよ。どのドアを開ければ良いかわからないね。どっちへ行く？」

二人は、一番近くのドアを開けてみました。

次の部屋は、タオルやカーテンや布地の部屋でした。次も、また次も……。いくつもの部屋が、迷路のように繋がっています。今度はなんだ？ と期待を込めて、二人いっしょに「せーの」と声を揃えて開けた部屋は、椅子ばかり。

それ次は！？ バケツやジョーロ、ホースや植木鉢、モップにホウキ、長靴がギッシリ。

もう二人とも、右へ行けば良いのか？ 左へ行けば良いのか？ いったい、今どこにいるのすか？ さっぱりわからなくなってしまいました。

オデールさんの継ぎ足し倉庫へ初めて入った二人に、外へ出る近道や戻り道がわかるはずもなく、いったい、いくつのドアを開けたのでしょうか？

「どうする？ どっちへ行く？ 右？ 左？ 前？ 後ろ？ アブラカタブーラ」

そうすけくんは、右手の人差し指をペロッと舐め、クルクル回っています。

くるみちゃんにはそんな元気はありません。

フーとため息をひとつ吐いて、壁に寄り掛かりました。

すると、ギーと板が動いて、くるみちゃんは後ろに尻餅をついてしまいました。

「あいたたたあ、あ、あれ？」

「くるみ、外に出られたよ！ あれ？ 外だけど、外じゃない」

「えー、ここ、どこ？」イチジクの木が3本あるだけの小さな四角い庭。

「なんでこんなに小さな庭を作ったのかなあ？」

庭を造ったわけではありません。小屋を建てなかったのです。

オデールひいお爺さんが小さな店を作った時、店の裏は、全部畑でした。

ひいお爺さんには子供が5人生まれ、みんな揃って働き者でした。店が手狭になるにつけ、

裏の畑は倉庫小屋として生まれ変わってきたのです。

けれど、ひいお爺さんの時代に植えられた木は、1本たりとも切ったりせず、大切に育てられました。継ぎ足し小屋がモコモコと建てられても、大切に育てられた木たちは、今も残されています。小屋と小屋の間には、古い井戸のある中庭や、ブルーベリーのある中庭、オリーブの中庭、月桂樹の中庭などがあります。

二人が、いちじくの木の前でぼんやりしていると、いきなり、ドアからおじさんが入って来ました。

「やあー、こんにちは」

おじさんは、走り抜けて行ってしまいました。二人は、声を揃えて

「こんにちは」と、言いました。

「あれ？せっかくおじさんに会えたのに！！」

「早く、追いかけてよ」

二人は、おじさんが消えたドアを開けましたが、そこには荷物倉庫があるだけです。

「おじさん、何処へ行ったのかな？」

二人は仕方なく次から次へとドアを開けて、倉庫の中を走りまわりました。

大きな家具の倉庫に入って来た時、二人はとうとう力つき、大きな椅子を見つけて、ヘナヘナと座りこんでしまいました。

口を利く元気もありません。

くるみちゃんはそうすけくんの顔を見つめました。

ツケマツゲを鼻の横に2枚つけているけど、なんだかお兄さんに見えてきました。

トトトト.....おじさんが駆け込んで来ました。

「やあ、かくれんぼかい？」 さっきとは違うオデールさんです。

「おじさん！ おじさん！」二人は、追いかけてました。

「まあだだよ」おじさんは、笑いながら走って行ってしまいました。

「待ってよ、おじさーん。おじさーん！」

大きな家具がたくさんあるので、小さなくるみちゃん達は、すぐにおじさんを見失ってしまいました。

「かくれんぼかい？ だってさ。出口を教えて欲しいのに」

「今何時ぐらいかなあ、もうきっと、とうさんもかさんもいないよね。お昼のお弁当の時間も、過ぎちゃったよね。心配してるかなあ」

そうすけくんは、なんとかしなければと、体中から力を出して

「だーれーかー、いませんかー」わざと、明るい声で言ってみました。

倉庫の中は、しーんと静まり返っています。その時、

「グルルル」そうすけくんのお腹が鳴りました。

「ふふふふ」

「ぐふふふふ」

「あははははは」

「へへへへへへ」

「あーあ、お腹、すいちゃったなあ……」

「あっ、ポケットに何か入っている。

「あっ、そうだった。KENさんにチョコ貰ったんだ。助かったね」二人はチョコレートをひとつづつ口に入れました。

「うん。すごくおいしいね」

初めて食べる《アンデス・インダス》のチョコレートの外側はホロ苦く、それが口の中で解けると、チョコの中に入っていた甘いジャムが、トロリと口の中いっぱいに広がりました。

KENさんがくれたチョコレートには、甘い葡萄のジャムが入っていました。

「あれ、そうすけくん、葡萄色のヨダレ出てるよ」

そうすけくんは、ギュッと握った拳で口のまわりをぬぐいました。

「うわあああー、くるみい、血が出てるうー」

「ちがうよ、そうすけくん、さっきつけた口紅だよ」

「ああ、そうか。そうだった。ぼく、くるみだけ面白い顔しているのかと思っていたのにい」

「えええー、そんなあ。そうすけくんだって、メチャクチャな顔しているのにい」

二人の顔は、走り回っていた時の汗と、チョコレートつきのヨダレ、ほんのちょっぴりの涙が混じった頬紅、アイシャドーや口紅、おまけに鼻や顎にくっついていたツケマツゲがもつれて、極彩色の毛虫のようになっていました。

「なんだか、チョコレートを食べたら元気になってきたね。きっとどこかに、誰かがいるよと思うよ。二人でいっしょに大きな声で呼んでみようよ！」

「せーの！ だーれーかー、いませんかあー」

お腹に力を入れて、体を二つ折りにしながら大きな声を出しました。すると、

「イヒヒヒヒヒーン」

「ンヒヒヒヒヒーン」

何か奇妙な声が聞こえて来ました。

「うわお。ぐんぐんとずんずんだ！」

「ほんとだ！ ぐんぐんとずんずんだよ。近いよ。近くにいるよ。こっちだあ！」

二人は口バの声のする方に近寄り、大きな木の扉をガラガラガラと横に引いてみました。

そこはキラキラとした明るい太陽の光が溢れる、確かに、外！ でした。

「外だ外だ！ 外に出られた！ やった！ やった！」

「ぐんぐん！！ ずんずん！！」

ありがとう！！

外に出られた！」

干し草の匂いの中で、ぐんぐんとずんずんは、イヒヒヒと笑いながら立っていました。

ロバ小屋の横では、ピンクのシャツに赤い蝶ネクタイのオデールさんが、荷車にジャガイモの袋を、「どっこいっせ！」と持ち上げているところでした。

オデールさんはいきなり現れた二人を見て

「おやおや？ こりゃまた！ 突然現れたもんだよお。それに、また二人ともえらくべっぴんさんだよお。どちらのお子さんだったかな？」

くるみちゃんは、とうさんとかあさんを探しに来たことを、荷車オデールさんに話しました。「そりゃまた、ずいぶんと前に帰ったよ。少しは待っていたんだけど、きっと来ないんだねって、話していたようだったね。お昼になるからって、帰って行ったよ」

くるみちゃんは、ガックリと座り込んでしまいました。

そうすけくんも、くるみちゃんの隣にペタンと座りました。ピンクシャツのおじさんは「ほおーい、ほい」と、軽々二人を荷車の上に持ち上げると、「なあに、心配しなくてもいいんだよ。おじさんはね、これから横町まで配達に行くところさ。好きな所まで乗せてあげるよ」

と言って、ぐんぐんとずんずんを荷車に繋ぎ、

「そーーれい！ そーーれい！」と大きな声で言いました。

それを合図に、ぐんぐんとずんずんは、ポコパコ、ポコパコと、歩き始めました。

くるみちゃんとそうすけくんは、大きなジャガイモ袋に寄り掛かって、ゆらゆら揺れながら、空と雲を眺めています。

「アビルやデイジーは、何しているかなあ。とうさんとかあさんはお昼食べちゃったかな？」と、くるみちゃんが考えていると、そうすけくんが

「あああ、お腹すいたなああ」とため息まじりに言いました。

## 第9章 やっと、一息

---

「ジャガイモと玉葱は倉庫へ入れてね。卵はこっちに貰うわ。あらあらやだ、ピカソの絵みたいな子供が二人いたわ。まあ、まあ」

《にっちゃっちゃんのお弁当屋さん》の裏口に、ぐんぐんとずんずんが引く荷車が到着したところでした。

ジャガイモ袋に寄り掛かって、スヤスヤと眠っているくるみちゃんとそうすけくんを見つけた京子さんは、エプロンをヒラヒラさせながら、荷馬車と店を行ったり来たりしています。

「ねえ、あなたあ、いたわよお。二人がいたわよ。店の前に、貼紙を貼っておいてえ」

「どれどれ、お姫さまと王子さまの到着かい？ こりゃまた、立派な顔して帰って来たもんだ。さあさあ、起きた起きた。井戸で顔洗ってこいや」

京子さんの旦那さんが、二人にタオルをくれました。

二人は言われたまま、ノロノロと井戸へ向かい、冷たい水でジャブジャブと顔を洗うと、タオルの中から子供らしいツルンとした顔が表れました。井戸のそばでそれを見ていたぐんぐんとずんずんが、頭と頭をくっつけて、「ニヒヒー、イヒヒー」と笑いました。

「お弁当を取りに来ないから心配していたのよ。今すぐ温かいのを作るからここで食べて行くといいわ。あなたあ、《ハフハフハーブ》へ貼紙を回してちょうだいね。それから《カチコチウオッチ》へもお願いね」

京子さんは、「おあがり」と言いながら、ぐんぐんとずんずんの前に金平糖を乗せた手を広げました。

ロバは驚くほど器用に、小さな金平糖を手から落とさずに食べました。

「グルルルルウ」今度は、くるみちゃんのお腹がなりました。

「ルルルルルウ」ずんずんがまねっこしました。

「あらら、大変、腹ぺこちゃんに早くお弁当を作らないとね」

京子さんは、くるみちゃんが注文した、カリフラワーとマカロニの真っ白グラタンと、青イチジクのサラダ。そうすけくんには、ツナサンド（玉葱抜き）と、ゆで卵入りトマトサラダを、チャッ、チャッ、チャッ、と作っています。

二人は、京子さんの両側に立ち、《ヨウコソヨウコソ》での出来事を、せっせと話しました。

京子さんがガス台から水道の蛇口へ、調理台からガス台へと、クルクル動いても、二人とも京子さんから離れまいと、両側でしっかりとエプロンにしがみつき、京子さんの顔を見上げて、鍋のタワーの話...、石鹼がどんなにたくさんあったかとか...、たぶん100回はドアを開けたとか...、200回はドアを閉めたとか...、ときどき京子さんのお尻と調理台に顔を挟まれ、ギューウーとなりながらも、ひたすらしゃべり続けました。

「さあ、できたわよ。そんなに走り回ったの？ 大変だったわねえ。でも、なんだか楽しそうね。おばさんも一緒にいたかったなあ。お腹空いたでしょう、はい！ さっきの冒険に負けにくい、ビックリするほど美味しいわよ。ゆっくり食べてね」

熱々のグラタンを、フウフウ言いながら食べていたくるみちゃんのもとへ、京子さんの旦那さんがお茶を運んできてくれました。

それは《ハフハフハーブ》から届いた、貼紙付きのお茶でした。

くるみちゃんへの貼紙は、かあさんからとポリーさんからの2枚ありました。

【くるみへ。お昼に戻って来ないのでどうしたのかな？ と思ったのよ。でも、とうさんと二人で先に食べちゃったあー。とうさんはピッポさんの家具工場へ行きました。かあさんは、エミリーのお手伝いをするから《お寝坊パン》へ行きます。あとで顔見せてね。エミリーと待ってるね】

【くるみちゃん、見せたいものがあるのよ。ユズの宝物なの、とても可愛いなのよ。早く来てね。待ってるよ】……《ハフハフハーブ》のポリーさんからの貼紙です。

いったいユズちゃんの宝物って何でしょう？

そうすけくんへの貼紙もありました。《カチコチウオッチ》のヒデコさんからです。

【そうすけくん何処にいるの？ 探しましたよ。ウララさんから着替えの荷物が届いています。いつまでもその格好では歩きにくいでしょう。自転車も店にありますよ。待っていますよ。……ヒデコ】

二人は、ソワソワしながら、それでもお弁当を、ぜんぶ綺麗にたいらげました。

「おばさん、今何時？」

「そうねえ、そろそろ3時よ。おやつ食べる？」

「ううわああ、もうそんな時間。大変だ！ グズグズ出来ないよ！ そうすけくん行くよ！ おじさん、おばさん、ありがとう。ごちそうさま。お茶のカップはユズちゃんのところへ持って行くね」

二人は、《にっちゃっちゃんのお弁当屋さん》を満腹気分で出発しました。

くるみちゃんは、何処かにとうさんの貼紙はないかな？ とジグザグ歩き、《麒麟のツノ》という、木琴やマリンバや角笛を売っている小さな店の前で、やっと一枚見つけました。

【ケロケロ、例の物は見つかったケロ？ こちらはきみが見つからないケロ！】

とうさんの貼紙のまわりには面白い野次馬貼紙が3枚ありました。

【ケロケロって、何だケロ？】

【ケロケロよりも、例のものって、何だケロ】

【きみが見つからないって？ カエルの卵に黄身あったっけ？ 教えてケロ】

くるみちゃんはカエルのアップリケがついた袋から、秘密のマーク入り貼紙を出して、返事を書きました。

【ケロケロしろないうちにとけすぎた！ まだだめケロ】

文字を間違えてしまったくるみちゃんの貼紙は、新たな野次馬貼紙たちに囲まれ、《麒麟のツノ》の小さな店の前では人垣が絶えません。

とうとう、『カエルの卵の黄身と白身を探そう！ マリンバ演奏会』なんてものができてしまったほどです。

もちろん、本人はそんなこと、まったく知りません。だって、くるみちゃんは【知らないうちに時計が過ぎた】と、書いたつもりだったのですもの。

## 第10章 カチコチウオッチ

---

二人は噴水広場へ戻って来ました。

《カチコチウオッチ》の店の前に、ヒデコさんとイサムさんがきちっと並んで立っています。

「あー、来た来た。来たわよ。来た、来たわあ。あなた、来たわよほら！」

「僕にも見えていますし、それに、一度言えばわかります」

「あらやだ、そりゃそうだわ、やだ、ガーハッハッハッハッ。あらやだ」

ヒデコさんが隣で大笑いしていても、イサムさんはまっすぐ前を見えています。

「そうすけくん、待っていたのよ。さあ、入って。くるみちゃんも遊んでいかない？」

「ありがとう、おばさん。おじさん、こんにちは。わたし買い物があるの。行かなくちゃ。そうすけくん、じゃあ、また後でね」

くるみちゃんは、カップを落とさないように、走って行きました。

《カチコチウオッチ》のイサムさんはきちっとした人で、毎朝同じ時間に起きて着替え、洗面、朝食と進み、店の掃除も同じリズムで右回りに進みます。

羽根ハタキを小刻みに隅々までかけ、床をモップで綺麗にした後、ウィンドーをピカピカに磨きます。大切な時計に埃は禁物です。

《カチコチウオッチ》の周りに住む人達は、イサムさんを見ていれば時計がいりません。

||| イサムさんが大時計にハタキをかけているから8時だ |||

||| 右側の床をモップで拭いているから8時25分だ |||

||| 入り口のガラスを磨いているから9時になるよ |||

||| イサムさんが10時のお茶を飲んでいるわ |||

昼食後と、2時と4時のお茶も日課にしています。

細かい時計の仕事なので、ポリーさんに特別にブレンドしてもらった、カシスとブルーベリーのお茶をかかさずに飲んで、目を大切にしています。

お店の中はすこぶる清潔、掛け時計はもちろん、貼紙一枚でさえ曲がった物はありません。時計が大好き。机の上も、引き出しの中も、キッチンとしていて、小さなネジ1つでも何処にあるかわからなくなることはありません。

お茶の前には外へ出て、筋肉を伸ばしたり縮めたり、体操をします。

大好きな時計の仕事をずっと続けていくために、きちんと考えて生活をしているのですが、時計と共にきちっと暮らすイサムさんでも、どうにもならない、時間通りにいかないことがひとつだけあります。

奥さんのヒデコさんです。

ヒデコさんは横町の人気者。

一歩店を出ると、会う人会う人に呼び止められ、立ち話が始まり、いつ終わるのやらサッパリわかりません。

昨日も朝食後、お茶の葉を買いに3軒先の《ハフハフハーブ》へ行ったまま、戻って来たのは昼でした。イサムさんは、通りから聞こえてくる「ガハハハハー」と言うヒデコさんの笑い声を聞きながら仕事をしています。

ヒデコさんは立ち話しをしながら、イサムさんが店の前に出て来て、筋肉を伸ばす体操をしているのを見て

「よしよし、今日も元気だわ」と、心の中で思います。

イサムさんは外から聞こえてくるヒデコさんの笑い声の調子で

「よしよし、今日も元気だな」と思っているのです。

そうすけくんは、時計屋さんの貼紙を、ひとつひとつ読んでみました。

【どんなに古い時計でも修理します。状態が悪いほど、修理する闘志が湧きます】

【鳩時計に飽きてしまったら、鳩をカッコウとかカナリアとか、あるいはトンビにすることもできます】

【小さな文字盤が読みづらい腕時計のレンズを、老眼用に取り替えます】

【いらぬ時計は捨てずに持って来て下さい。取りにもいきます。ネジや歯車を大切に役立てます】

【普通の目覚ましでは起きられない場合、目覚ましの音を大きくできます】

【時計ではどうしても起きられない人には、ヒデコが起こしに行きます】

そうすけくんは、イサムさんが作ったからくり時計の数々に驚いてしまいました。

こんなに凄いものを作れるなんて、きっとおじさんはメチャクチャ凄い人なんだ。

そんなおじさんのシャツを、クチャクチャにしてしまって申し訳ない...などと、随分しおらしくなっていました。

未完成と書かれた棚を見た時には、思わず「あーっ」と大きな声が出てしまいました。青い自転車を漕ぐ男の子のからくり時計があったのです。

「おじさん、こ、これ！」

「まだまだ、完成ではないんだ。君は今度学校へ上がるんだらう？ それまでに出来るといいんだが。近ごろは夜の仕事がきつくなってきてなあ」

おじさんは、独り言のように言いました。

「えっ！ やっぱりこれ僕ですか？ うわあ、すごい！ やったあ！ おじさん、なんなら僕学校へ行くのを1年伸ばしてもいいです」

「ほらほら、とぼけたこと言ってないで、こっちにいらっしやい。着替えるんでしょ」

ヒデコさんが大笑いしています。

## 第11章 ユズちゃんの愛

---

くるみちゃんは、《ハフハフハーブ》に着きました。

まるで自分の店のように、デイジーが入り口の真ん中で寝ています。

犬のユズちゃんは口に紐を喰わえて座っていました。その紐の先は、茶色の可愛い子猫の首輪に繋がっていました。

「ポリーさん、この猫ちゃんどうしたの？」

くるみちゃんは、ポリーさんに子猫との出会いの話を聞きました。

ある朝、ポリーさんとユズが、いつものようにハーブガーデンへハーブを摘みに行くと、畑から子猫が飛び出して来ました。犬のユズを見ても、ちっとも怖がらず、ドンドン近づいて来る猫に、後ずさりしたのは、むしろ犬のユズの方でした。

ユズはもともと大人しい犬で、ポリーさんとハーブガーデンへ行ったり、店番をしているだけで充分満足ですし、お客さんに話し掛けられても、頭を撫でてもらっても、特に嬉しいわけでもなく、ポリーさんの澄んだ高い声を聞きながら、ハーブの香りに包まれていれば安心していられるのです。

ハーブガーデンで突然あらわれた子猫が、自分にドンドン近寄って来て、体にすり寄ったり、尻尾にじゃれついたりしたとき、最初はとてもビックリだったのです。

だけど、自分が初めて小さな生き物に甘えられた時って、きっと誰でも、胸の奥の方から、今まで知らなかった感情が生まれてくるものなのではないでしょうか。ユズも、その柔らかな子猫にすり寄せられた時、もう離れたくないと思う気持ちで、いっぱいになっていました。

ポリーさんが畑の中をたっぷりと時間をかけて歩き回っている間に、子猫とユズはすっかり仲良しになり、離れるなんて考えられなくなっていました。

偶然にも、子猫の体はユズと同じオレンジがかった茶色で、ユズの背中に乗って眠っていると、同じ布で作ったぬいぐるみのようです。

「ユズ、帰るよ！」ポリーさんがそう言った時、ユズは子猫をくわえて離しません。

とうとう、店まで連れて帰ってしまったのです。

今まで、ポリーさんの姿が見える所から離れたことのないユズでしたが、やんちゃな子猫を連れ帰ってからは、ウロチョロする子猫のお守で落ち着きません。お店に来たお客さんや通りを歩く人が、

「あらー、可愛い子猫！」と言ったりすると、もう心配で心配で、だんだん目と目の間にシワができてしまいます。ポリーさんが猫好きなお客さんに

「欲しかったら、持って行って」

と、言った声を聞いた後は、もう一本シワが増えてしまいました。

ニコニコしたお客さんが子猫を抱き上げようものなら、今まで店のお客さんに向かって一度も吠えたことのないユズが（よろけたお客さんに思いきり尻尾を踏まれた時も、慌て者のお客さん

がドアでユズの鼻を挟んだ時にも、吠えたことがないのです！) 鼻にシワを寄せ、歯を剥き出して怒るのです。

子猫の方はといえば、誰に触られても咽をゴロゴロ言わせるし、どんな狭い所でも潜り込んで寝てしまいます。一度なんて、子猫を探して屋根の煙突に登ってしまったユズは、降りられなくなってしまい、煙突掃除やさんにおぶってもらって、やっとのことで降りられたのですが、一晚震えが止まらなくなってしまったこともあるのです。

それからというもの、ユズは子猫を見失わないよう、昼も夜も眠らなくなってしまいました。

ポリーさんはそんなユズをみて、

「安心させてあげないと、病気になっちゃうわ」

と思い、その子猫に※きんかん※と言う名前をつけて、首輪も付けてあげました。

そして、首輪に長い紐を付けて、

「これから仲良く三人で暮らそうね。」と、ユズにその紐をくわえさせたのです。

でも、お客さんが子猫を抱っこしてなかなか返してくれないと、心配で心配で、オデコの真ん中に || 心配です... || と描いたような顔になってしまいます。

大人しいユズでしたが、今ではしょっちゅう※きんかん※の紐をくわえているので、ますます静かなのです。

※きんかん※の方は呑気な性格で、店の真ん中でお腹を見せて寝ています。

くるみちゃんは、ユズの頭を撫でながら、

「ユズちゃんと※きんかん※って、そっくりの色で親子みたいだね」と話し掛けました。

ユズは嬉しくて、尻尾を振りながら、紐をくわえた口から、ツーーーーとよだれを垂らしました。

隣にいたデイジーはヤレヤレとでも言いたげに、「ふんんっ」と寝返りしました。

「買い物は済んだの？」

ポリーさんの言葉を聞いたくるみちゃんは、バネが弾けたように飛び出して行きました。

## 第12章 ブックス・サイレント

---

くるみちゃんは、また用事を忘れてしまいました。

ドンドン時間が過ぎて行きます。

「タイヘンダー、タイヘンダー、マダダッター、マタマタダー、マタマダダッター」  
走って、走って《ブックス・サイレント》のドアを乱暴に開け、一番奥の大きな木の机のある所まで、息をきらせて突進してきました。

シーンと静まり返った店の中にいた人達は、何ごとかと、くるみちゃんを見ている。

「マタダマダ！」

「マダマタダ」

「マダマダダダ」

机の前で書きものをしていたおじいちゃんに、ぶつかるような勢いのくるみちゃんは、今にも泣きそうです。

自分では泣いていないつもりですが.....

「マダ.....ダ！」くるみちゃんは、泣いてなんかないよ！ と、もう一度きっぱり言うつもりでしたが、言えたのは、

「.....ダ！.....」だけでした。

そんなくるみちゃんを、おじいちゃんはヒョイと持ち上げると、大きな木の机の上に座らせました。

KENさんも、ゆっくりとくるみちゃんに近づいて来て、黙ったまま、耳の横に挟んでいた鉛筆を鼻の下に挟みました。

それを見たおじいちゃんも、机の上の鉛筆立てから鉛筆を一本取り、鼻の下に挟みました。

くるみちゃんは「ふううー」と言いながら、おじいちゃんとKENさんの顔を交互に何度も見ました。

くるみちゃんは心の中で || | なんてここに来ちゃったのだろう？ || | と考えました。  
この二人 || |。この二人 || |。

《ブックス・サイレント》は、半分はおじいちゃんの本屋さん、後の半分はKENさんの新しい本屋さんです。

二人は横町でも一番と二番を争うほど静かな親子で、歩き方も、咳も、クシャミも、笑い方も、何から何まで、そっくりです。お客さんにもものを訪ねられても、同じように静かに答えるのです。

お客さんは、この《ブックス・サイレント》の親子は、静かにしているのが大好きとわかっているのです。注文も、質問も、全部貼紙に書いて机の上に置いておきます。注文された本はKENさんのサイドカーで配達されます。

おじいちゃんは裏庭で花の世話ばかりしているので、お客さんは勝手に本のお金を置いて行くし、おつりが必要な時は、引き出しから勝手に出して、持って行きます。

おじいちゃんも、KENさんも、自分たちで書いた貼紙は、ほとんどありません。  
たった一枚、店先にずっと貼ってある貼紙があります。  
【たくさん育ったので、よかったら、あげますよ】  
貼紙の下には、おじいちゃんが育てた花の植木鉢が並んでいます。

《ブックス・サイレント》の蔵書の数、店主の口数と反比例して、豊かです。  
いつか、ぶらりと入って来たトムじいさんが、  
「ハアァー、たまげた！ こりゃこりゃたまげた！ ここにあるのは、ゼーンぶ本かい？ 本つうのはこんなにあるもんかい？ こりゃゼーンぶ違うことが書いてあんのかい？ こりゃ、ラクダ山の森の木よりも多かんべ。うん、わしゃそう思う。わしの小屋にもあっただ。本がな、あっただ。ばあさんが嫁に来た時、持ってきただ。〔初めての出産と育児〕という本だったな。うんだで、わしゃ言っただ。なんも心配はいらね一だ。わしゃ、羊とヤギを山ほど育てて来ただで、  
大丈夫だっ！ と話して聞かせたら、ばあさん、めんこい顔して笑っただ。けんど、ばあさん、「うっかり子供産むの忘れた」と言っとった。天国へ行く少し前に、言っとったな。まーだほんに若い頃だ。93だったでな。まだ娘っこだったな。ばあさんが天国へ旅立って間もないころ、台風が来てな、棚からその本が落ちただ。若いメスのヤギが、その本を、ペロリと喰っちまった。あのメスのヤギは、ずっと子供を産んでいるんだな。数えきれぬほどな。だからな、あれだ、本つうのは、読むより、喰った方が役に立つんだな。うん、わしゃ、そう思う」  
後にも先にも、《ブックス・サイレント》でこれだけ長くおしゃべりしたのは、トムじいさんだけです。

ビッシリとある本棚の隙間隙間を見つけては、あちこちに椅子やソファーや細長いベッドまで置いてあり、好きな場所で、じっくり本が読めるようになっています。

お客さんの中には、何時間も本を読み続ける人が、たくさんいます  
寝転がって読んだり、勉強をしている人もいます。

《ブックス・サイレント》で買った本を家で読まずに、毎日通っては、店の椅子で読む人もいます。本を読みたい気持ちになるし、読んだ本が頭にスイスイ吸い込まれていくからです。

店の中二階は書斎コーナーがあり、壁一面に絵ハガキや手紙が貼ってあります。世界中を旅する、お金の無い若者達が、この書斎コーナーのベッドで、数日過ごしていきます。

外の井戸を使わせてもらい、本を読んだり、旅人の手紙を読んだり、おじいちゃんが集めた地図や風土記を見たりして、また旅立って行きます。

おじいちゃんとKENさんは、自分が珈琲やお茶が飲みたくなったら、必ず多めに作って、裏庭のテーブルに置いておくので、旅の若者や勉強している人々は大助かりです。

《ブックス・サイレント》の話は、旅人から旅人へと伝わり、次々と若者が訪れます。

世界中から絵ハガキや手紙が届いたり、やがて成長した若者達からの報告は、おじいちゃんやKENさん、常連のお客さん、旅の若者達にとって、宝物です。

学者や研究者になった人、作家になった人、写真集を出した人から送られてきた数々の本は、書齋コーナーにまとめて飾られています。

中には、|||孫がお世話になりました|||と、自宅の蔵書をドサッと送ってくる人や、お手紙コーナーの中から友達や恋人を見つけた人もいます。

長い間に《ブックス・サイレント》の書齋コーナーは、一つの世界を確立していきました。

今日も頭に白いターバンを巻いた若者が、書齋コーナーの机で、手紙を書いています。

くるみちゃんはたくさんの本に囲まれて、気持ちが冷静になって来ました。

おじいちゃんとKENさんに、静かにお話できるようになりました。

「かあさんの誕生日のプレゼントを見つけに来たのに、まだ何も見つからないの。何故だかわからないけど、プレゼントを見つけることとは、違うことばかりしちゃうの。とうさんの貼紙も、あまり見つからなかったの」

KENさんもおじいちゃんも、もう鼻の下にえんぴつを挟んではいません。

おじいちゃんは、回転椅子を右に左にユラリユラリ動かし、組んで座った上の足も上下に揺らしながら、右手でおでこをポリポリ搔いています。

KENさんは、右手の人指し指と中指に挟んだ鉛筆を、クルクル動かしながら、表通りを眺めています。

くるみちゃんもぶらりとした足を揺らしてみました。

二人は押し黙ったままです。

くるみちゃんには、それがとても長い時間に思えました。

## 第12章 ブックス・サイレント

---

裏庭にいる犬のタタが、犬小屋から顔だけこちらに向け、重ねた手の上に顎を乗せて、フウウウ……と、鼻から大きな息を吐きました。

「くるみちゃん、《青いトンガリ帽子》という、お店を知っていますか？」

おじいちゃんは、誰と話す時でも丁寧です。

「青いトンガリ帽子？ 知らないよ」

「じゃあ、行ってみますか？ 地図を描いてあげます」

地図が大好きなおじいちゃんは、絵本のように描いてくれました。

「ここなら、かあさんの気に入るものが、見つかると思いますよ」

おじいちゃんは、大きな木の机からくるみちゃんを下ろして、

「がんばってください」と、頑張れないような小さな声で言いました。

KENさんは、くるみちゃんの肩をポンポンと叩くと、

「むっ！」と、右手をグウにして、ファイトのポーズをとりました。

くるみちゃんも右手をグウにして、「ムウ！！」と答えました。

「行ってくる！」

くるみちゃんは地図を握って店を飛び出しましたが、慌てて戻って来ると、カエルのバックからケロマーク入りの貼紙を取り出し、

【あおいとんがりぼおしくケロ！】と書いて、入り口にペタンと貼り、走って行きました。

おじいちゃんは裏庭へ行き、犬小屋の前に座りました。

「たまには、散歩へ行きませんか？」

おじいちゃんは犬にも丁寧に話しかけます。

犬のタタは散歩が大嫌い。自分のことは、なんでも自分で考えます。犬のように扱われるのは、我慢が出来ないのです。

知らない人に声をかけられても、見向きもしません。

店が閉まると、古い革張りの本のある棚の前に来て、ゴロツと横になり、目を細めて、その匂いを楽しみます。

古い革の本には、革の匂いだけではなく、本の中にも家の匂いや料理の匂いが染みついている、タタにはたまらなく気持ちが良いのです。

営業時間中は、けっして、店に入ってきません。

お客さんに「よう、元気かい？」なんて、頭を撫でられたりするのを避けるためです。

毎朝、裏庭の垣根の周りを、右回りに三回歩くと、井戸のそばのベンチに座り、おじいちゃんが花の手入れをするのを監督し、お昼を過ぎると、犬小屋に入って、魚の図鑑の上に頭を乗せて昼寝をします。

夕方になると、また井戸のそばのベンチに座り、垣根の外に睨みをきかせ、近所の犬が散歩の途中に、タタに挨拶していくのを確認します。

タタのお気に入りの魚の図鑑は、古い革張りで、厚さは7センチもあります。

18年前、タタが2歳の頃、自分で本棚から叩き落とし、犬小屋へ喰わえていきました。

今までに犬小屋は3回作り直しましたが、その度に新しい小屋の一番奥に、自分でしまいました。革の表面にあった金箔はもちろん剥げ落ち、何の本なのかは、タタにしかわかりませんが、きっと魚好きな人が、何度も、潮の匂いのする手で調べものをしたのでしょう。

たっぷりと、海や川の匂いが染みているようです。

タタは珍しく、すんなりと小屋から出て来ました。タタは、おじいちゃんが、「たまには、散歩へ行きませんか？」と、自分に話し掛けたのは、何年前だろう？ と驚いた勢いで、立ち上がってしまったのです。

こんな時トムじいさんなら、

「はあ、たいした、たまげたあ、空からメロンが飛んできたみてえだなあ」

と、言ったに違いありません。

タタとおじちゃんは、並んで歩き始めました。タタが横町の石畳の道を歩くなんて……。明日はきっと、【久しぶりにタタに会った！】という貼紙を、町中で見かけることでしょう。

タタは、ギシギシと骨が鳴る足腰を、誇らし気に揺らしながら歩きました。

実のところ、おじいちゃんは照れくさくて、ひとりでは出掛けられなかったのです。くるみちゃんの事が心配で、後をつけているなんて……。

だけど……、タタを連れて来てしまっは、かえって目立つのに……。

## 第13章 プレゼントは買えたかな

---

くるみちゃんは、おじいちゃんの描いてくれた地図をギュッと握り、唇を固く結び、道の真ん中をズンズン歩いています。

この横町は初めて通る道で、知らない店がたくさんありましたが、もう脇目もふらず寄り道もしません。

きつとかあさんに素敵なプレゼントを見つけるぞ、と自分に言い聞かせながら歩きました。

通りの奥に、おじいちゃんの地図に描いてあるのと同じ、青いトンガリ帽子をかぶったコビトさんの看板がありました。鉄で出来たコビトさんがたくさんいます。

糸巻き車を回すコビトさんや、機を織るコビトさん、針と糸を持っているコビトさん達が、石で出来た外壁に付けられています。

ガラスのウィンドーは1つしかなく、ドアも木で出来ていて、お店の中の様子がぜんぜん見えません。

初めて来たお店に一人で入るのはとても勇気がいるんだな、と少しドキドキしました。

くるみちゃんがお店の前で佇み、ふと、いま来た通りを振り返ると、タタを連れたおじいちゃんが立っていました。おじいちゃんは、くるみちゃんと目が合うと、コクリと大きく頷きました。くるみちゃんも、おじいちゃんにコクリと頷き返しました。

「よしっ」

くるみちゃんは声を出して、お店の木のドアを開けました。

カランカランと、トンガリ帽子のコビトさんが持つドアベルが鳴りました。

店に入ったくるみちゃんは、ビックリ仰天！

まるでお花畑のように、たくさんの色が、目に飛び込んできたのです。

天井には、細い材木で格子状に木組みがしてあり、そのひとつひとつから、藤の花が咲き乱れるように、ねじった糸の房が無数にぶら下がっています。

壁の方はというと、ちょうどくるみちゃんの胸の高さに飾り棚があり、その上はすべて正方形の箱で区切られています。これもまた、その箱ピッタリの大きさに巻かれた、太さの違う様々な糸が、虹のようにズラッと入っています。

天井にも、壁の棚にも、あらゆるところに、鉄製の青いトンガリ帽子のコビトさんが見え隠れしています。糸を運ぶコビトさん、手を振るコビトさん、足を組みながらほおづえをつくコビトさん、ようこそとおじぎをするコビトさん、逆立ちでおどけるコビトさん、仰向けで足を組みながら居眠り中のコビトさんもいます。

くるみちゃんは初めて見るものばかりで、口をポカンと開けたままです。

店にはお客さんはいません。お店の人も出てきません。犬も猫も姿が見えませんが、コビトさんの店なののでしょうか？ 突然、コビトさんが動きだしたら、どうしよう...

奥の方でカタン、カタンと規則的な音がしています。少し奥へと歩いてみました。

二人の女の人が座っていました。一人は機を織っています。

もう一人の女の人は刺繍のような針仕事をしています。

「こんにちは」と小さな声が聞こえました。

くるみちゃんも頭をピョコンと下げて、「こんにちは」と返事をしました。

女の人はそれっきり黙ったまま、また針仕事を始めました。

くるみちゃんは体がコチコチになっています。手と足がうまく動きません。

蟹さんのように横歩きをしながら、飾り棚の上に置かれた美しい織物をひとつひとつ見ていきました。

薄いトンボの羽のようなストール、蝶々のようなストールなど、色とりどりです。バッグや化粧ポーチ、手提げ袋、手袋に帽子、白地に黒アゲハ蝶の刺繍のついた日傘まであります。

亀さんやカエルさんのおどけた模様の刺繍がしてある、子供用の室内履きやスリッパもあります。小さな物もたくさんありました。

ブックカバーや栞、ペンケースや眼鏡入れ、鏡の入った巾着袋、どれも織物に刺繍が施された見事な手仕事です。

今までに、こんなに、どれもこれも素敵だと思った事はありませんでした。

くるみちゃんは、ドングリを口一杯に詰め込んだリスの刺繍の手提げ袋が気に入りました。

もしユーリンさんなら、この羊が並んで眠っている枕カバーを選ぶかな？ ウララさんはどれが好きかな？ かあさんなら...？ かあさんなら...？

かあさんが一番好きな物はどれだろう？

こんなにワクワクする物ばかりの中から一つを選ぶなんて、とてもできない。かあさんに喜んでもらえる物を選ぶって本当に難しいんだわ...

くるみちゃんは心細くなってきてしまいました。

カランカランと音がしました。ドアを開けて入って来たのは、とうさんです。

「やあ、くるみ」

くるみちゃんはなんだかホッとして、口がへの字になってしまいました。

「どおした？ くるみ。随分待たせちゃったかな？」

とうさんはくるみちゃんの頭に手を置きました。

目の奥がしょっぱいような、熱いような、のどに何かが詰まってしまって苦しいような、おかしい気持ちです。

「ずいぶんと綺麗な物がたくさんあるんだなあ。これじゃ選ぶのが難しいなあ」

とうさんはキョロキョロしています。

「あっ、くるみ。コビトさんがあちこちにいるよ。見つけたかい？ 何人いるかなあ。一緒に数えてみるか？」

一匹、二匹、？ あっ、違うな...一人、二人か。いやいや、一個二個にするか。天井を見上げたとうさんがつぶやいています。

くるみちゃんはとうさんの手を引っ張りました。

「あっ、そうだったな。こんな事してる場合じゃないね、ふふふん」

と、笑ったので、くるみちゃんも思わず笑いました。

「やっと笑ったね。じゃ、かあさんのプレゼントを一緒に決めよう！」

とうさんは眠いとき以外は、いつもメチャメチャ元気なのです。

店の奥から、さっき刺繍をしていた女の人が出てきました。

「こんにちは」と、とうさんに挨拶をしました。

とうさんは二人でプレゼントを探しに来たと話をしました。するとその女の人が、

「いろいろありますけれど、もし良ければ、たった今刺繍を終えて、出来上がったばかりの物がありますので、お見せ致しましょう」

そう言って、奥から帽子を持ってきました。

それは、様々なピンクの糸を織り込んである布に、うっすらとピンクの花が、風に揺れて舞う花吹雪のように、細かく刺してある、柔らかな印象の帽子でした。

これならかあさんにピッタリだ！ と、くるみちゃんはすぐに思いました。

とうさんもその帽子を眺めて満足気な顔をしています。

「きっと、かあさんにぴったりだな。くるみはどうだい？」

うん、と頷きました。

「それにあれだなあ、かあさんの誕生日に出来上がった帽子だなんて、ますますいいなあ、くるみ。ふふふん」

とうさんはすっかりご機嫌です。つられて、くるみちゃんもご機嫌です。

「リボンをかけて綺麗に包みますね。もし良かったら、こちらでお茶をどうぞ」

とうさんは勧められるまま、奥の機織り機のある方へ行き、

「これはなんですか？ はあ？ こうなってるんだあ、へえ。細かい仕事だ。たいしたもんだな。僕は駄目だ、ずっと座っているとすぐに眠くなっちゃうから」

ハッハッハッと、奥からとうさんの大きな声が聞こえてきます。

「くるみー、お茶を頂いたよ。一緒にどうだい？」

父さんの声を聞きながらくるみちゃんは、虹のような、花畑のようなこのお店の中の、コビトさんを数えていました。

「ひとり、ふたり、さんにん、あっ、あそこにもいた！ ごにん、ろくにん…」

糸玉の中から顔だけを出しているコビトさんも見つけました。

## 第14章 さあ、帰ろう

---

とうさんとくるみちゃんが揃って貼紙横町の噴水広場に戻って来た時には、すっかり夕暮れになっていました。

また、何やら人だかりが出来ています。どうしたんだろう？

人垣の中へ入ってみました。

「そうすけくん！ どうしたの？」

人垣の中心にいたのは、また、そうすけくんです。

今度はピカピカのそうすけくんでした。

髪は、見たことないほど、キッチリと梳かしてあり、よそゆきの洋服に、蝶ネクタイまでしています。

「《カチコチウォッチ》のおばさんが風呂に入れてくれて、耳も爪も綺麗に洗って、おまけにピッチリアイロンもかけてくれるし、おじさんが15分も僕の髪を梳かしてくれたんでね。まあ、こんなにかっこ良くなっちゃった、わけよ。デヘヘー」

と笑ったので、またみんなで大笑いです。

「ほらほら、貼紙を預かっているのよ」

ポリーさんが、とうさんとくるみちゃんに渡してくれました。

「あーれー、ポリーさんがスカート履いているの、初めて見たあ」

ポリーさんもオシャレをして、ユズときんかんとデイジーと一緒に、ゆりかごワゴンに乗りに行きました。

受け取った貼紙には、

【かあさんは先に家に帰ります。着替えもあるしね。ふふふー】

【くるみちゃん、早く帰って来てね。ウララさんの弾くピアノで、トムじいさんが踊っているのよ】

かあさんとユーリンさんからでした。

「ちょっと、ちょっと、ちょっと、どいてどいて！ みんな固まってないでどいてよお。重いんだからあ」

エミリーとミカさんが、とびきり大きなケーキの箱を運んで来ました。

「だいたいさあ、なんであたしに、蛸二匹がしがみついているのよお！」

「だってほら、エミリーの方が背が高いから、バランス取らないと」

「だけどさあ、この蛸の蝶ネクタイ、なんとかなんないのあ。もお、さっきから可笑しくて可笑しくて、力が入らないよ」

「やだやだ、可愛いでしょ。ねっ、チョット、ほら、そうすけには負けられないからね」

「可愛いかあ？ まったく笑っちゃうよ」

わさわさ、わさわさ、二人は大騒ぎしながら、ゆりかごワゴンにケーキを運びました。

貼紙横町にある風車の待合室イーゴのベンチは、いつもにまして混み合っています。

行列の右に並ぶと木馬、左に並べばゆりかごワゴンに乗ることが出来ます。

乗り場近くで、ヒデコさんとイサムさんがどっちに乗るかで、もめています。

「いいでしょう。ワゴンにしましょうよ。夜風の中を二人でワゴンに乗るのは久しぶりなもの」

「僕は、木馬が良いです」

「あらやだ、このひと。一緒にワゴンに乗りましょうよ」

「僕は、なんだか、その……」

「あらやだ、なんだか、なあーに？」

「ぼくは、その、向かい合って乗るのが……照れくさいです」

うううう——ひよよよう

混み合いながら、後ろに並んでいる人達の中で、せっかちに文句を言う人はいません。むしろ、二人の会話の成りゆきが気になります。俄におしゃべりの花が咲き始めました。

「みんなで、貼紙占いをしよう」

「しよう、しよう」

「そうしよう」

後ろに並んだ人達は、一斉に自分の持っている貼紙束から一枚取り出し、二人が乗るのは『木馬』か『ワゴン』かを書き、「いっせいのーせ」で高く貼紙を投げました。

何枚もの貼紙がヒラヒラと宙を舞って降りて来ました。

文字が書いてある表側が何枚あるか、その数で、ヒデコさんとイサムさんが、木馬に乗るか？ワゴンに乗るか？を占っています。

「えーと、木馬という文字が7枚見えるよ。あややー、ワゴンと言う文字も7枚見える。こりゃだめだ。もう一度やってみよう。はい、自分の貼紙を拾って、もう一度。いっせいのーせ」

「ありゃあー、今度は全部裏返しだった。もう一度だ」

「なんだ、なんだ、何の貼紙占いだね？私も混ぜてくれよ」

「さあさあ、他にはいないか？さあさあ、お次はないかね。入った、入った」

野次馬ががやがやしている間に、イサムさんは、ヒデコさんの隣で背中をまっすぐコチコチにして、ワゴンに揺られて行きました。

「そうそう、並べばいいんでしょう。まったく、毎日向かい合って御飯食べているのに、おかしなひとねー。照れくさいだなんて、あーはあっはっはっ、笑っちゃうわ、あーはっはっはっ」

「笑うのはいいですけど、揺れるので、もう少し静かに笑って下さい」

「あらやだ、静かに笑ったことないもの。どうやればいいのかしら。あらやだ、できっこないわ、  
がー、はっはっはっはー」

二人が乗ったワゴンは、ヒデコさんの体にあわせて、ゆらゆら揺れています。

隣に座るイサムさんは、真直ぐな背中で、コチコチと振り子のように揺れています。

イーゴ風車の待ち合い室では、とっくに二人が去ったことなどおかまいなしに、まだ、わいわいと、貼紙占いが続いています。

## 第14章 さあ、帰ろう

---

くるみちゃんととうさんは、迷うことなく、木馬に乗りました。

木馬にも、ワゴンにも、並び立つ風車にも、色とりどりの豆電球が灯され、キラキラと輝いた光が線になって繋がり、黄昏色の草原やオリーブ畑の中を、笑い声を乗せながら進んで行きます。

墨絵のようなシルエットのラクダ山の上に、目を細めた月が白く昇りました。

遠くに点滅する木馬の飾り電球が、低く降りて来た星の間を抜けるように見えます。

くるみちゃんが星を数えていたそのとき、イヒヒヒーンと声が聞こえました。

ぐんぐんとずんずんの引く荷馬車が、オリーブ畑の細道を村に向かっていきます。

荷台には、とうさんが注文した材木と一緒に、大きな西瓜が5つと、貼紙付きの可愛らしい花束が、たくさん乗っています。

「くるみちゃん、ヤッホー！ ほらみてえー、今夜のパーティの御馳走よ。おいしいーのよ。今日、くるみちゃんたちの話を聞いて、おばちゃんも、荷車に乗りたくなっちゃたの。楽しいわー」

にっちゃっちゃっの京子さんと旦那さんが、大きな鍋の蓋を押さえて、荷車の上でガタガタと揺れています。

旦那さんの方は、3つの鍋の蓋を押さえているので、手を振ることもできません。口を大きく「にー」を開き、笑いながら、頭を小刻みに左右に振っています。

それを見たとうさんは、くるみちゃんのひとつ後ろの木馬で、大声で笑い続けています。

もう、とうさんは笑い過ぎて声も絶え絶えです。くるみちゃんも、おかしくておかしくて、お腹が痛くなっちゃいました。

「くるみー、キャッホイホイ！」

来ました、来ました、そうすけくんです。

「くるみー、見て見て、自転車の後ろ、見える？ にっちゃっちゃっのおばさんに貰ったんだ。新しいのに取り替えるから、あげるってー、もらったんだよー、みえる？ ほら、でかでおたまー。あとで、このおたまにアビルののっけて、かけっこしようよー、うっ、キャッホイホイ」

そうすけくんは、洋服がシワにならないように、自転車をずっと立ち漕ぎのままです。

細道に、もう一台、何かがやってきました。

KENさんのサイドカーに乗ったタタの姿！！

ふかふかのクッションの上に、シャンと座っています。体には毛布を巻いて、なんとタタの頭には、くるみちゃんの赤いポンポンが付いた帽子がのっかり、ずり落ちてしまわないようにくるみちゃん用のゴム付きサングラスでとめています。

タタは、何が何でもパーティに行きたいのです。

3年前までは、自力で走って行きました。

タタは、20年前、かあさんがちょうど今のくるみちゃんと同じ年の誕生日に、プレゼントとして可愛い箱に入ってやってきました。

半年もしない内に、りっぱな偏屈犬に成長し、自分では、かあさんのお兄さんと思い込んでいるようです。

賑やかが大嫌いのタタですが、かあさんの誕生日には、必ず、かあさんの隣にずっと座り続けているところを見ると、タタもこの日が、自分にとって大切な記念日と思っているのでしょう。

空の色がずんずん濃くなっていきます。

草原に強く風が吹く度に、星が銀色の粉を蒔き、露にとけて大草原の草の上で、もう一度光ります。

くるみちゃんは、木馬の上で、木馬の頭をじーっとみつめています。

ラクダ山から降りて来た山風が、くるみちゃんの左の頬を撫でたとき、木馬の顔が、ふと左に向いたように見えました。

そんなはずないよね、木馬だもん！ でも、海風がくるみちゃんの右の頬を撫でに来た時、木馬の顔が少し右を向きました。

そんなはずないよ！ だって木馬だもん。

「とうさん！ ほら！ 山風がくるよ。ラクダの背中を滑り降りてくるよ。とうさん！ 海からも風がきたよ。うわーあ、風がクルって回ったよ！ 木馬の鼻の穴からフフンて聞こえたよ。風が...、風が見えるよ」

くるみちゃんと、山風の女神と、海風の女神を乗せた、木馬のイサベルは、風車のリブに向かって、ぐんぐんと走っていきます。

おわり